

永井荷風

わたくしは殆ど活動写真を見に行つたことがない。

おぼろ気な記憶をたどれば、明治三十年頃でもあろう。神田錦町にあつた貸席錦輝館で、サンフランシスコ市街の光景を写したのを見たことがあつた。活動写真という言葉のできたのも恐らくはその時分からであらう。それから四十余年を過ぎた今日では、活動という言葉は既にすたれて他のものに代えられているらしいが、初めて耳にしたものの方が口馴れて言いやすいから、わたくしは依然としてむかしの廢語をここに用いる。

震災の後、わたくしの家に遊びに来た青年作家の一人が、時勢におけるからと言って、無理やりにわたくしを赤坂溜池の活動小屋に連れて行つたことがある。何でもその頃非常に評判の好いものであつたというが、見ればモオパッサンの短編小説を脚色したものであつたので、わたくしはあれなら写真を見るにも及ばない。原作をよめばいい。その方がもっと面白いと言つたことがあつた。

しかし活動写真は老弱の別なく、今の人の喜んでこれを見て、日常の話柄にしているものであるから、せめてわたくしも、人が何の話をしていのかというくらいの事は分かるようにして置きたいと思つて、活動小屋の前を通りかかる時には看板の画と名題には勉強して目を向けるように心がけている。看板を一瞥すれば写真を見ずとも脚色の梗概も想像がつくし、どういう場面が喜ばれているかという事も会得せられる。

活動写真の看板を一度に最も一瞥する事のできるのは浅草公園である。ここへ来ればあらゆる種類のものを一ト目に眺めて、おのずからそ

の巧拙をも比較することができ。わたくしは下谷浅草の方面へ出掛ける時には必ず思出して公園に入り杖を池の縁に曳く。

夕風も追々寒くなつて来た或日のことである。一軒一軒入口の看板を見尽して公園のはずれから千束町へ出たので。右の方は言問橋左の方は入谷町、いずれの方へ行こうかと思案しながら歩いて行くと、四十前後の古洋服を着た男がいきなり横合いから現れ出て、

「檀那、御紹介しましょう。いかがです。」と言う。

「イヤありがとう。」といって、わたくしは少し歩調を早めると、

「絶好のチャンスですぞ。猟奇的ですぞ。檀那。」といって尾いて来る。

「いらぬ。吉原へ行くんだ。」

ポン引というのか、源氏というのかよく知らぬが、とにかく怪し気な勧誘者を追払うために、わたくし口から出まかせに吉原へ行くと言つたのであるが、行先の定らない散歩の方向は、かえつてこれがために決定せられた。歩いて行く中わたくしは土手下の裏町に古本屋を一軒知つていることを思出した。

古本屋の店は、山谷掘の流が地下の暗渠に接続するあたりから、大門口日本堤橋のたもとへ出ようとする薄暗い裏通にある。裏通は山谷掘の水に沿つた片側町で、対岸は石垣の上に立続く人家の背面に限られ、こなたは土管、地瓦、川土、材木などの問屋が人家の間にやや広い店口を示しているが、堀の幅の狭くなるにつれて次第に貧気な小屋がちになつて、夜は堀にかけられた正法寺橋、山谷橋、地方橋、髪洗橋などという橋の灯がわずかに道を照らすばかり。堀もつき橋もなくなると、人通りも共に途絶えてしまう。この辺で夜も割合におそくまで灯をつけている家は、かの古本屋と煙草を売る荒物屋ぐらいのものであるう。

わたくしは古本屋の名は知らないが、店に積んである品物は大概知つ

ている。創刊当時の『文芸倶楽部』が古い『やまと新聞』の講談附録でもあれば、意外の掘出物だと思わなければならない。しかしわたくしがわざわざ廻り道までして、この店をたずねるのは古本のためではなく、古本を鬻ぐ亭主の人柄と、廓外の裏町という情味とのためである。

主人は頭を奇麗に剃った小柄の老人。年は無論六十を越している。その顔立、物腰、言葉使から着物の着様に至るまで、東京の下町生粋の風俗を、そのまま崩さずに残しているのが、わたくしの眼には稀覯の古書よりもむしろ尊くまた懐しく見える。震災のころまでは芝居や寄席の楽屋に行くと一人や二人、こういう江戸下町の年寄に逢うことができたたとえば音羽屋の男衆の溜爺やだの、高嶋屋の使っていた市蔵などいう年寄たちであるが、今はいずれもあの世へ行ってしまった。

古本屋の亭主は、わたくしが店先の硝子戸をあける時には、いつでもきまつて、中仕切の障子際にきちんと坐り、円い背を少し斜に外の方へ向け、鼻の先へ落ちかかる眼鏡をたよりに、何か読んでいる。わたくしの来る時間も大抵夜の七、八時ときまつているが、その度ごとに見る老人の坐り場所もその形も殆どきまつている。戸の明く音に、折かがんだまま、首だけひよいとこなたへ向け、「おや、いらっしやいまし。」と眼鏡をはずし、中腰になって坐布団の塵をぽんと叩き、匍うような腰付で、それを敷きのべながら、さて丁寧に挨拶をする。その言葉も様子もまた型通りに変りがない。

「相変らず何も御座ません。お目にかけるようなものは。そうそうたしか『芳譚雑誌』がありました。揃っちゃおりませんが。」
「為永春江の雑誌だろう。」

「へえ。初号がついておりますから、まアお目にかけられます。おや、どこへ置いたかな。」と壁際に積重ねた古本の間から合本五、六冊を取

出し、両手でばたばた塵をはたいて差出すのを、わたくしは受取って、
「明治十二年御届としてあるね。この時分の雑誌をよむと、生命が延る
ような気がするね。『魯文珍報』も全部揃ったのがあったら欲しいと思っ
ているんだが。」

「時々出るにや出ますが、大抵ばらばらで御座いましたな。檀那、『花
月新誌』はお持合わせでいらっしゃいますか。」

「持っています。」

硝子戸の明く音がしたので、わたくしは亭主と共に見返ると、これも
六十あまり。頬のこけた禿頭の貧相な男が汚れた縞の風呂敷包を店先に
並べた古本の上へ卸しながら、

「つくづく自動車はいやだ。今日はすんでの事に殺されるところさ。」

「便利で安くつてそれで間違いが無いなんて、そんなものは滅多にない
よ。それでも、お前さん。怪我アしなさらなかつたか。」

「お守が割れたおかげで無事だった。衝突したなア先へ行くバスと円タ
クだが、思出してもぞつとするね。実は今日鳩ヶ谷の市へ行つたんだが
ね、妙な物を買った。昔の物はいいいね。さし当り捌口はないんだが見る
とつい道楽がしたくなる奴さ。」

禿頭は風呂敷包を解き、女物らしい小紋の単衣と胴抜の長襦袢を出し
て見せた。小紋は鼠地の小浜ちりめん、胴抜の袖にした友禅染もちよつ
と変わったものではあるが、いずれも維新前後のものらしく特に古代と
いうほどの品ではない。

しかし浮世絵肉筆物の表装とか、近頃はやる手文庫の中張りとか、ま
た草双紙の帙などに用いたら案外いいかも知れないと思つたので、その
場の出来心からわたくしは古雑誌の勘定をするついでに胴抜の長襦袢一
枚を買取り、坊主頭の亭主が『芳譚雑誌』の合本と共に紙包にしてくれ

るのを抱えて外へ出た。

日本堤を往復する乗合自動車に乗るつもりで、わたくしは暫く大門前の停留場に立っていたが、流しの円タクに声をかけられるのが煩いので、もと来た裏通へ曲り、電車と円タクの通らない薄暗い横町を折み折み歩いて行くと、忽ち樹の間から言問橋の灯が見えるあたりへ出た。川端の公園は物騒だと聞いていたので、川の岸までは行かず、電燈の明るい小径に沿うて、鎖の引廻してあるその上に腰をかけた。

実はこっちへの来がけに、途中で食麵麩と鐘詰とを買い、風呂敷へ包んでいたので、わたくしは古雑誌と古着とを一つに包み直して見たが、風呂敷がすこし小さいばかりか、堅い物と柔いものとはどうも一緒にはうまく包めない。結局鐘詰だけは外套のかくしに収め、残の物を一つにした方が持ちよいかと考えて、芝生の上に風呂敷を平にひろげ、頻に塩梅を見ていると、いきなり後の木陰から、「おい、何をしているんだ。」といいさま、サアベルの音と共に、巡査が現れ、猿臂を伸してわたくしの肩を押えた。

わたくしは返事をせず、静に風呂敷の結目を直して立上がると、それさえ待どしいといわぬばかり、巡査は後からわたくしの肱を突き、「そっちへ行け。」

公園の小径をすぐさま言問橋の際に出ると、巡査は広い道路の向側にある派出所へ連れて行き立番の巡査にわたくしを引渡したまま、急しそつにまた何処へか行ってしまった。

派出所の巡査は入口に立ったまま、「今時分、何処から来たんだ。」と尋問に取りかかった。

「向の方から来た。」

「向の方とはどっちの方だ。」

「堀の方からだ。」

「堀とはどこだ。」

「真土山まつちやまの麓ふもとの山谷堀という川だ。」

「名は何という。」

「大江匡おおえただす。」と答えた時、巡査は手帳を出したので、「匡ただすは「」に王の字をかきます。一タビ天下ヲ匡スと『論語』にある字です。」

巡査はだまれと言わぬばかり、わたくしの顔を睨にらみ、手を伸ばしていきなりわたくしの外套の釦ぼたんをはずし、裏を返して見て、

「記号しごうはついていないな。」つづいて上着の裏を見ようとする。

「記章しるしとはどういう記章です。」とわたくしは風呂敷包を下に置いて、上着チヨツキと胴着の胸を一度にひろげて見せた。

「住所は。」

「麻布区御筆笥町一丁目六番地。」

「職業は。」

「何なんにもしていません。」

「無職業か。年はいくつだ。」

「己つちのとの卵とうです。」

「いくつだよ。」

「明治十二年己の卵の年。」それきり黙っていようかと思つたが、後がこわいので、「五十八。」

「いやに若いな。」

「へへへへ。」

「名前は何と叫んだね。」

「今言いましたよ。大江匡。」

「家族はいくたりだ。」

「三人。」と答えた。実は独身であるが、今日までの経験で、事実をいうと、いよいよ怪しまれる傾があるのかたむきので、三人と答えたのである。

「三人というのは奥さんと誰だ。」巡査の方がいい様に解釈してくれる。

「嬢アとばばア。」

「奥さんはいくつだ。」

ちよつと窮つたが、四、五年前まで姑く関係のあつた女の事を思出して、

「三十一。明治三十九年七月十四日生丙午……。」

もし名前をきかれたら、自作の小説中にある女の名を言おうと思つたが、巡査は何にもいわず、外套や背広のかくしを上から押え、

「これは何だ。」

「パイプに眼鏡。」

「うむ。これは。」

「鐘詰。」

「これは、紙入れだね。ちよつと出して見せたまえ。」

「金が入っていますよ。」

「いくら這入っている。」

「サア二、三十円もありましようかな。」

巡査は紙入を抜き出したが中は改めずに電話機の下に据えた卓子の上に置き、「その包は何だ。こつちへ這入ってほどいて見せたまえ。」

風呂敷包を解くと紙につつんだ麵麩と古雑誌まではよかつたが、胴抜の艶めかしい長襦袢の片袖がだらりと下るや否や、巡査の態度と語調は忽一変して、

「おい、妙なものを持っているな。」

「いや、ははははは。」とわたくしは笑い出した。

「こりゃア女のきるもんだな。」巡査は長襦袢を指先に摘み上げて、燈

火にかざしながら、わたくしの顔を睨み返して、「どこから持って来た。」

「古着屋から持って来た。」

「どうして持って来た。」

「金を出して買った。」

「それはどこだ。」

「吉原の大門前。」

「いくらで買った。」

「三円七十銭。」

巡査は長襦袢を卓子の上に投捨てたなり黙ってわたくしの顔を見ているので、大方警察署へ連れて行って豚箱へ投込むのだらうと、初はじめのようにならかう勇氣がなくなり、こつちも巡査の様子を見詰めていると、巡査はやはりだまつたままわたくしの紙入を調べ出した。紙入には入れ忘れたまま折目の破れた火災保険の仮証書と、何かの時に入用であった戸籍抄本に印鑑証明書と実印とが這入っていたのを、巡査は一枚一枚静にのべひろげ、それから実印を取って篆刻てんくした文字を燈火にかざして見たりしている。大分暇がかかるので、わたくしは入口に立ったまま道路の方へ目を移した。

道路は交番の前で斜に二筋に分れ、その一筋は南千住みなみせんじゆ、一筋は白髯橋しらひげばしの方へ走り、これと交叉こうさして浅草公園裏の大通が言問橋を渡るので、交通は夜になつてもなかなか頻繁であるが、どういふことか、わたくしの尋問されるのを怪しんで立止る通行人は一人もない。向側の角のシャツ屋では女房らしい女と小僧とがこつちを見ていながら更に怪しむ様子もなく、そろそろ店をしまいかけた。

「おい。もういいからしまいたまえ。」

「別に入用なものでありませんから……。」
「呟きながらわたくしは紙入をしまい風呂敷包をもとのように結んだ。」

「もう用はありませんか。」

「ない。」

「御苦労さまでしたな。」
「わたくしは巻煙草も金口のウエストミンスターにマッチの火をつけ、薫だけでもかいで置けといわぬばかり、烟を交番の中へ吹き散して足の向くまま言問橋の方へ歩いて行つた。後で考えると、戸籍抄本と印鑑証明書がなかつたなら、大方その夜は豚箱へ入れられたに相違ない。一体古着は気味のわるいものだ。古着の長襦袢が祟りそこねたのである。」

二

『失踪』と題する小説の腹案ができた。書き上げることができたなら、この小説はわれながら、さほど拙劣なものでもあるまいと、幾分か自身を持つていたのである。

小説中の重要な人物を、種田順平という。年五十余歳、私立中学校の英語の教師である。

種田は初婚の恋女房に先立たれてから三、四年にして、継妻光子を迎えた。

光子は知名の政治家某の家に雇われ、夫人付の小間使となつたが、主人に欺かれて身重になつた。主家ではその執事遠藤某をして後の始末をつけさせた。その条件は光子が無事に産をしたなら二十個年子供の養育費として毎月五拾円を送る。その代り子供の戸籍については主家では全然与り知らない。また光子が他へ嫁する場合には相当の持参金を贈ると

いうような事であつた。

光子は執事遠藤の家へ引取られ男の児を産んで六十日たつか経たぬ中やはり遠藤の媒介で中学校の英語教師種田順平なるものの後妻となつた。時に光子は十九、種田は三十歳であつた。

種田は初めの恋女房を失つてから、薄給な生活の前途に何の希望をも見ず、中年に近くちかづに従つて元氣のない影のような人間になつていたが、旧友の遠藤に説きすすめられ、光子母子おやこの金にふと心が迷つて再婚をした。その時子供は生れたばかりで戸籍の手續もせずにあつたので、遠藤は光子母子の籍を一緒に種田の家に移した。それ故のち後になつて戸籍を見ると、種田夫婦は久しく内縁の關係をつづけていた後、長男が生れたため、初めて結婚入籍の手續をしたもののように思われる。

二年たつて女の児が生れ、つづいてまた男の児が生れた。

表向おもてむきは長男で、実は光子の連子つれこになる為年が丁年になつた時、多年秘密の父から光子の手許に送られていた教育費が途絶えた。約束の年限が終つたばかりではない。実父は先年病死し、その夫人もまたつづいて世を去つた故である。

長女芳子と季兒すえこ為秋ためあきの成長するに従つて生活費は年々多くなり、種田は二、三軒夜学校を掛持ちして歩かねばならない。

長男為年は私立大学に在学中、スポーツマンとなつて洋行する。妹芳子は女学校を卒業するや否や活動女優の花形となつた。

継妻光子は結婚当時は愛くるしい円顔であつたのがいつか肥満した婆ばあとなり、日蓮宗に凝りかたまつて、信徒の団体の委員に挙げられている。種田の家は或時は宛さなら講中こうちゆうの寄合所、或時は女優の遊び場、或時はスポーツの練習場もよろしくという有様。その騒しさには台所にも鼠が出ないくらいである。

種田はもともと気の弱い交際嫌いな男なので、年を取るにつれて家内の喧騒には堪えられなくなる。妻子の好むものは悉く種田の好まぬものである。種田は家族の事については勉めて心を留めないようにした。おのれの妻子を冷眼に視るのが、気の弱い父親のせめてもの復讐であつた。五十一歳の春、種田は教師の職を罷められた。退職手当を受取つたその日、種田は家にかえらず、跡をくらましてしまった。

これより先、種田はかつてその家に下女奉公に来た女すみ子と偶然電車の中で邂逅し、その女が浅草駒形町のカフェーに働いている事を知り、一、二度おとずれてビールの酔を買つた事がある。

退職手当の金をふところにしたその夜である。種田は初て女給すみ子の部屋借をしているアパートに行き、事情を打明けて一晩泊めてもらつた……。

*

それから先どういふ風に物語の結末をつけたらいいものか、わたくしはまだ定案を得ない。

家族が搜索願を出す。種田が刑事に捕えられて説諭せられる。中年後に覚えた道楽は、むかしから七ツ下りの雨に譬えられているから、種田の末路はわけなくどんなにでも悲惨にすることが出来るのだ。

わたくしはいろいろに種田の墮落して行く道筋と、その折々の感情とを考へつづけている。刑事につかまって拘引されて行く時の心持、妻子に引渡された時の当惑と面目なさ。その身になったらどんなものだろう。わたくしは山谷の裏町で女の古着を買つた帰り道、巡査につかまり、路端の交番で厳しく身元を調べられた。この経験は種田の心理を描写する

には最も都合の好い資料である。

小説をつくる時、わたくしの最も興を催すのは、作中人物の生活及び事件が開展する場所の選択と、その描写とである。わたくしはしばしば人物の性格よりも背景の描写に重きを置き過るような誤に陥ったこともあった。

わたくしは東京市中、古来名勝の地にして、震災の後新しき町が建てられて全く旧観を失った、その状況を描写したいがために、種田先生の潜伏する場所を、本所か深川か、もしくは浅草のはずれ、さなくば、それに接した旧郡部の陋巷に持つて行くことにした。

これまで折々の散策に、砂町や亀井戸や、小松川、寺島町あたりの景況には大略通じているつもりであったが、いざ筆を着けようとすると、俄に観察の至らない気がして来る。かつて、(明治三十五、六年の頃) わたくしは深川洲崎遊郭の娼妓を主題にして小説をつくった事があるが、その時これを読んだ友人から、「洲崎遊郭の生活を描写するのに、八、九月頃の暴風雨や海嘯のことを写さないのは杜撰の甚しいものだ。作者先生のお通いなすった甲子楼の時計台が吹倒されたのも一度や二度のことではなからう。」と言われた。背景の描写を精細にするには季節と天候にも注意しなければならぬ。例えば、ラフカジオ、ハーン先生の名著チタあるいはユーマの如くに。

六月末の或夕方である。梅雨はまだ明けてはいないが、朝から好く晴れた空は、日の長いころの事で、夕飯をすまして、まだたそがれようともしない。わたくしは箸を擱くと共にすぐさま門を出で、遠く千住なり亀井戸なり、足の向く方へ行って見るつもりで、一先電車で雷門まで往くと、丁度折好く来合わせたのは寺島玉の井としてある乗合自動車である。

吾妻橋をわたり、広い道を左に折れて源森橋をわたり、真直に秋葉神社の前を過ぎて、また姑く行くと車は線路の踏切でとまった。踏切の両側には柵を前にして円タクや自転車が幾輛となく、貨物列車のゆるゆる通り過るのを待っていたが、歩く人は案外少く、貧家の子供が幾組となく群をなして遊んでいる。降りて見ると、白鬚橋から亀井戸の方へ走る広い道が十文字に交錯している。ところどころ草の生えた空地があると、家並が低いので、との道も見分のつかぬほど同じように見え、行先はどこへ続くのやら、何となく物淋しい気がする。

わたくしは種田先生が家族を棄てて世を忍ぶ処を、この辺の裏町にして置いたら、玉の井の盛場も程近いので、結末の趣向をつけるにも都合がよからうと考え、一町ほど歩いて狭い横道へ曲って見た。自転車も小脇に荷物をつけたものは、摺れちがう事が出来ないくらいな狭い道で、五、六歩行くごとに曲っているが、両側とも割合に小奇麗な耳門のある借家が並んでいて、勤先からの帰りとも見える洋服の男や女が一人二人づつ前後して歩いて行く。遊んでいる犬を見ても首輪に鑑札が付けてあって、さほど汚らしくもない。忽にして東武鉄道玉の井停車場の横手に出た。

線路の左右に樹木の鬱然と生茂った広大な別荘らしきものがある。吾妻橋からここに来るまで、このように老樹の茂林をなした処は一箇所もない。いずれも久しく手入れをしないと見えて、匍のぼる蔓草の重さに、竹藪の竹の低くしなっているさまや、溝際の生垣に夕顔の咲いたのが、いかにも風雅に思われてわたくしの歩みを引止めた。

むかし白鬚さまのあたりが寺島村だという話をきくと、われわれはすぐに五代目菊五郎の別荘を思出したものであるが、今日たまたまこの処にこのような庭園が残ったのを目にすると、そぞろに過ぎ去った時代の

文雅を思起さずにはいられない。

線路に沿うて売貸地の札を立てた広い草原が鉄橋のかかった土手際に達している。去年頃まで京成電車の往復していた線路の跡で、崩れかかった石段の上には取払われた玉の井停車場の跡が雑草に蔽われて、こなたから見ると城址のような趣をなしている。

わたくしは夏草をわけて土手に登って見た。眼の下には遮るものもなく、今歩いて来た道と空地と新開の町とが低く見渡されるが、土手の向側は、トタン葺の陋屋が秩序もなく、端しもなく、ごたごたに建て込んだ間から湯屋の烟突が屹立して、その傾きに七、八日頃の夕月が懸っている。空の一方には夕栄の色が薄く残っていないながら、月の色には早くも夜らしい輝きができ、トタン葺の屋根の間々からはネオンサインの光と共にラデオの響が聞え初める。

わたくしは脚下の暗くなるまで石の上に腰をかけていたが、土手下の窓々にも灯がついて、むさくるしい二階の内がすっかり見下されるようになったので、草の間に残った人の足跡を辿って土手を降りた。すると意外にも、其処はもう玉の井の盛場を斜に貫く繁華な横丁の半程で、ごたごた建て連った商店の間の路地口には「ぬけられます」とか、「安全通路」とか、「京成バス近道」とか、あるいは「オトメ街」あるいは「賑本通」など書いた灯がついている。

大分その辺を歩いた後、わたくしは郵便箱の立っている路地口の煙草屋で、煙草を買い、五円札の剩銭を待っていた時である。突然、「降ってくるよ。」と叫びながら、白い上っ張を着た男が向側のおでん屋らしい暖簾のかけに駆け込むのを見た。つづいて割烹着の女や通りがかりの人がばたばた駆け出す。あたりが俄に物気立つかと見る間もなく、吹落る疾風に葭簀や何かの倒れる音がして、紙屑と塵芥とが物の怪のように

道の上を走って行く。やがて稻妻が鋭く閃き、ゆるやかな雷の響につれて、ポツリポツリと大きな雨の粒が落ちて来た。あれほど好く晴れていた夕方の天気は、いつの間に変つてしまつたのである。

わたくしは多年の習慣で、傘を持たずに門を出ることは滅多にない。いくら晴れていても入梅中のことなので、その日も無論傘と風呂敷とだけは手にしていたから、さして驚きもせず、静にひろげる傘の下から空と町のさまとを見ながら歩きかけると、いきなり後方から、「檀那、そこまで入れてつてよ。」といいさま、傘の下に真白な首を突込んだ女がある。油の匂で結つたばかりと知られる大きな濱島田には長目に切つた銀糸をかけている。わたくしは今方通りがかりに硝子戸を明け放した女髪結の店のあつた事を思出した。

吹き荒れる風と雨とに、結立の鬘にかけた銀糸の乱れるのが、いたいたしく見えたので、わたくしは傘をさし出して、「おれは洋服だからかまわない。」

実は店つづきの明い燈火に、さすがのわたくしも相合傘には少しく恐縮したのである。

「じゃ、よくつて。すぐ、そこ。」と女は傘の柄につかまり、片手に浴衣の裾を思うさままくり上げた。

三

稻妻がまたぴかりと閃き、雷がごろごろと鳴ると、女はわざとらしく「あら」と叫び、一步後れて歩こうとするわたくしの手を取り、「早くさ。あなた。」ともう馴れ馴れしい調子である。

「いいから先へお出で。ついて行くから。」

路地へ這入ると、女は曲るたびごとに、迷わぬようにわたくしの方に振返りながら、やがて溝にかかった小橋をわたり、軒並一帯に葭簀の日蔽をかけた家の前に立留った。

「あら、あなた。大変に濡れちまつたわ。」と傘をつぼめ、自分のものよりも先に掌でわたくしの上着の雫を払う。

「ここがお前の家か。」

「拭いて上げるから、寄っていらっしやい。」

「洋服だからいいよ。」

「拭いて上げるっていうのにさ。わたしだってお礼がしたいわよ。」

「どんなお礼だ。」

「だから、まアお這入んなさい。」

雷の音は少し遠くなったが、雨はかえって礫を打つように一層激しく降りそそいで来た。軒先に掛けた日蔽の下にいても跳上る飛沫の烈しさに、わたくしはとやかく言う暇もなく内へ這入った。

荒い大阪格子を立てた中仕切へ、鈴のついたリボンの簾が下げた。その下の上框に腰をかけて靴を脱ぐ中に女は雑巾で足をふき、端折った裾もおろさず下座敷の電燈をひねり、

「誰もいないから、お上んなさい。」

「お前一人か。」

「ええ。昨夜まで、もう一人いたのよ。住替に行ったのよ。」

「お前さんが御主人かい。」

「いいえ。御主人は別の家よ。玉の井館ツていう寄席があるでしょう。その裏に住宅があるのよ。毎晩十二時になると帳面を見にくるわ。」

「じゃアのん気だね。」わたくしはすすめられるがまま長火鉢の側に坐り、立膝して茶を入れる女の様子を見やった。

年は二十四、五にはなっているであろう。なかなかいい容貌である。

鼻筋の通った円顔は白粉焼おしろいやけがしているが、結立ゆいたてての島田はえぎわの生際ぬけあがもまだ抜上ぬけあがつてはいない。黒目がちの眼の中も曇くちびるつてはいず唇や齒くちびるぐきの血色を見ても、その健康はまださして破壊されてもいないように思われた。

「この辺は井戸か水道か。」とわたくしは茶を飲む前に何気なく尋ねた。井戸の水だと答えたら、茶は飲む振りをして置く用意である。

わたくしは花柳病かりゅうびょうよりもむしろチブスのような伝染病を恐れている。肉体的よりも夙はやくから精神的廢人になったわたくしの身には、花柳病の如き病勢の緩慢なものは、老後の今日、さして気にはならない。

「顔でも洗うの。水道なら其処そこにあるわ。」と女の調子は極めて気軽である。

「うむ。後でいい。」

「上着だけおぬぎなさい。ほんとに随分濡れたわね。」

「ひどく降っているな。」

「わたし雷さまより光るのがいやなの。これじゃお湯にも行けやしない。あなた。まだいいでしょう。わたし顔だけ洗おしまって御化粧おしましてしまふから。」

女は口をゆがめて、懐紙ふところがみで生際の油をふきながら、中仕切の外の壁に取りつけた洗面器の前に立った。リボンの簾越もろはだしに、両肌もろはだをぬぎ、折りががんで顔を洗う姿が見える。肌は顔よりもずっと色が白く、乳房の形で、まだ子供を持った事はないらしい。

「何だか檀那だんなになったようだな。こうしていると、箆笥たんすはあるし、茶棚ちやだはあるし……。」

「あけて御覧なさい。お芋か何かあるはずよ。」

「よく片づいているな。感心だ。火鉢の中なんぞ。」

「毎朝、掃除だけはちゃんとしますもの。わたし、こんな処にいるけれど、世帯持は上手なのよ。」

「長くいるのかい。」

「まだ一年と、ちよつと……。」

「この土地が初めてじゃないんだらう。芸者でもしていたのかい。」

汲みかえる水の音に、わたくしの言うことが聞えなかつたのか、または聞えない振りをしたのか、女は何とも答えず、肌ぬぎのまま、鏡台前に坐り毛筋棒で鬢を上げ、肩の方から白粉をつけ初める。

「どこに出ていたんだ。こればかりは隠せるものじゃない。」

「そう……でも東京じゃないわ。」

「東京のいまわりか。」

「いいえ。ずっと遠く……。」

「じゃ、満州……。」

「宇都の宮にいたの。着物もみんなその時分だよ。これで沢山だわねえ。」

と言いながら立上がって、衣紋竹に掛けた裾模様の単衣物に着かえ、赤い弁慶縞の伊達締を大きく前で結ぶ様子は、少し大き過ぎる濱島田の銀糸とつりあつて、わたくしの目にはどうやら明治年間の娼妓のように見えた。女は衣紋を直しながらわたくしの側に坐り、茶ぶ台の上からパットを取り、

「縁起だから御祝儀だけつけて下さいね。」と火をつけた一本を差出す。

わたくしはこの土地の遊び方をまんざら知らないのでもなかつたので、

「五十銭だね。おぶ代は。」

「ええ。それはおきまりの御規則通りだわ。」と笑いながら出した手の平を引込まさず、そのまま差伸ばしている。

「じゃ、一時間ときめよう。」

「すみません。ほんとうに。」

「その代り。」と差出した手を取って引寄せ、耳元に囁くと、
「知らないわよ。」と女は目を見張って睨返し、「馬鹿。」と言いさま
わたくしの肩を撲った。

為永春水の小説を読んだ人は、作者が叙事のところどころに自家弁護
の文を挟んでいることを知っているのである。初恋の娘が恥しさを忘れ
て思う男に寄添うような情景を書いた時には、その後で、読者はこの娘
がこの場合の様子や言葉使のみを見て、淫奔娘だと断定してはならない。
深窓の女も意中を打明ける場合には芸者も及ばぬ艶しい様子になること
がある。また、既に里馴れた遊女が偶然幼馴染の男にめぐり会うところ
を写した時には、商売人でもこういう時には娘のようにもじもじするも
ので、これはこの道の経験に富んだ人たちの皆承知しているところで、
作者の観察の至らないわけではないのだから、そのつもりでお読みなさ
いというような事が書添えられている。

わたくしは春水に倣って、ここに剩語を加える。読者は初めて路傍で
逢ったこの女が、わたくしを遇する態度の馴々し過るのを怪しむかも知
れない。しかしこれは実地の遭遇を潤色せずに、そのまま記述したのに
過ぎない。何の作意も無いのである。驟雷雨鳴から事件の起つたのを見
て、これまた作者常套の筆法だと笑う人もあるだろうが、わたくしはこ
れを慮るがために、わざわざ事を他に設けることを欲しない。夕立が手
引をしたこの夜の出来事が、全く伝統的にお誂通りであつたのを、わた
くしはかえって面白く思い、実はそれが書いて見たいために、この一篇
に筆を執り初めたわけである。

一体、この盛場の女は七、八百人と数えられているそうであるが、そ
の中に、島田を丸鬚に結っているものは、十人に一人くらい。大体は女

給まがいの日本風と、ダンサア好みの洋装とである。雨宿あまやどりをした家の女が極く少数の旧風に属していた事も、どうやら陳腐の筆法に適当しているような心持がして、わたくしは事実の描写を傷けるきずつけに忍びなかった。

雨は歇やまない。

初め家へ上った時には、少し声を高くしなければ話が聞きとれないほどの振り方であったが、今では戸口へ吹きつける風の音も雷の響きも歇トタンぶきんで、亜鉛葺トタンぶきの屋根を撲つ雨の音と、雨だれの落ちる声ばかりになっている。路地には久しく人の声も聲音あしおとも途絶えていたが、突然、

「アラアラ大変だ。きいちゃん。鱧どじょうが泳いでるよ。」という黄いろい声につれて下駄げたの音がしだした。

女はつと立ってリボンの間から土間の方を覗のぞき、「家は大丈夫だ。溝があふれると、こつちまで水が流れてくるんですよ。」

「少しは小降りになったようだな。」

「宵の口に振るとお天気になっても駄目なのよ。だから、ゆっくりしていらつしやい。わたし、今の中に御飯たべてしまうから。」

女は茶棚の中から沢庵漬たくあんづけを山盛りにした小皿と、茶漬茶碗と、それからアルミの小鍋こなべを出して、ちよつと蓋ふたをあけて匂をかぎ、長火鉢の上に載せるのを、何かと見れば薩摩芋さつまいもの煮たのである。

「忘れていた。いいものがある。」とわたくしは京橋で乗換のりかえの電車を待っていた時、浅草海苔のりを買ったことを思いだして、それを出した。

「奥さんのお土産みやげ。」

「おれは一人なんだよ。食べるものは自分で買わなけりやア。」

「アパートで彼女と御一緒。ほほほほ。」

「それなら、今時分うるついちやアいられない。雨でも雷でも、かまわず帰るさ。」

「そうねえ。」と女はいかにも尤だもつともというような顔をして暖くなりかけたお鍋の蓋を取り、「一緒にどうぞ。」

「もう食べて来た。」

「じゃアあなたは向むいをむいていらっしやい。」

「御飯は自分で炊くのかい。」

「住宅すまいの方から、お昼と夜の十二時に持って来てくれるのよ。」

「お茶を入れ直そうかね。お湯がぬるい。」

「あら。はばかりさま。ねえ。あなた。話をしながら御飯をたべるのは楽しみなものね。」

「一人ツきりの、すっぱり飯めしはいやだな。」

「全くよ。じゃア、ほんとお一人。かわいそうねえ。」

「察しておくだろう。」

「いいの、さがして上げるわ。」

女は茶漬を二杯ばかり。何やらはしやいだ調子で、ちやらちやらと茶碗の中で箸はしをゆすぎ、さも急いそがしそうに皿小鉢を手早く茶棚にしまいながらも、顎おとがを動して込上げる沢庵漬のおくびを押さえつけている。

戸外そとには人の足音と共に「ちよいとちよいと」と呼ぶ声が聞え出した。

「歌んだようだ。また近い中に出て来よう。」

「きつといらっしやいね。昼間でもいます。」

女はわたくしが上着をきかけのを見て、後へ廻り襟えりを折返ししながら肩越しに頬を摺すり付けて、「きつとよ。」

「何ていう家うちだ。ここは。」

「今、名刺あげるわ。」

靴をはいている間に、女は小窓の下に置いた物の中から三味線しやみせんのバチの形に切った名刺を出してくれた。見ると寺島町七丁目六十一番地（二

部（安藤まさ方雪子。

「さよなら。」

「まっすぐにお帰んなさい。」

四

小説『失踪』の一節

吾妻橋のまん中ごろと覚しき欄干に身を倚せ、種田順平は松屋の時計を眺めては来かかる人影に気をつけている。女給のすみ子が店をしまつてからわざわざ廻り道をして来るのを待合しているのである。

橋の上には円タクの外電車もバスももう通っていないが、二、三日前から俄の暑さに、シャツ一枚で涼んでいるものもあり、包をかかえて帰りをいそぐ女給らしい女の往き来もまだ途絶えずにいる。種田は今夜すみ子の泊っているアパートに行き、それからゆっくり行末の目当を定めるつもりなので、行った先で、女がどうなるものやら、そんな事は更に考えもせず、また考える余裕もない。ただ今日まで二十年の間家族のために一生を犠牲にしてしまった事が、いかににがにがしく、腹が立ってならないのであった。

「お待ちどうさま。」思ったより早くすみ子は小走りにかけて来た。「いつでも、駒形橋をわたって行くんですよ。だけれど、兼子さんと一緒だから。あの子、口がうるさいからね。」

「もう電車はなくなつたようだぜ。」

「歩いたって、停留場三つぐらいだわ。その辺から円タクに乗りましよう。」

「明いた部屋があればいいが。」

「なかつたら今夜一晩ぐらい、わたしのところへお泊んなさい。」

「いいのか、大丈夫か。」

「何がさ。」

「いつか新聞に出ていたじゃないか。アパートでつかまつた話が……。」

「場所によるんだわ。きっと。わたしの処なんか自由なもんよ。お隣も向側もみんな女給さんかお妾さんよ。お隣なんか、いろいろな人が来るらしいわ。」

橋を渡り終らぬ中に流しの円タクが秋葉神社の前まで三十銭で行く事を承知した。

「すっかり変ってしまつたな。電車はどこまで行くんだ。」

「向嶋の終点。秋葉さまの前よ。バスなら真直に玉の井まで行くわ。」

「玉の井……こんな方角だつたかね。」

「御存じ。」

「たつた一度見物に行った。五、六年前だ。」

「賑よ。毎晩夜店が出るし、原っぱに見世物もかかるわ。」

「そうか。」

種田は通過る道の両側を眺めている中、自動車は早くも秋葉神社の前に来た。すみ子は戸の引手を動しながら、

「ここでいいわ。はい。」と賃銭をわたし、「そこから曲りましょう。あつちは交番があるから。」

神社の石垣について曲ると片側は花柳界の灯がつづいている横町の突当り。俄に暗い空地の一隅に、吾妻アパートという灯が、セメント造りの四角な家の前面を照している。すみ子は引戸をあけて内に入り、室の番号をしるした下駄箱に草履をしまうので、種田も同じように履物を取り上げると、

「二階へ持つて行きます。目につくから。」とすみ子は自分のスリッパを男にはかせ、その下駄を手にさげて正面の階段を先に立つて上る。

外側の壁や窓は西洋風に見えるが、内は柱の細い日本造りで、ぎしぎし音のする階段を上り切った廊下の角に炊事場があつて、シューミイズ一枚の女が、断髪を振乱したまま薬罐やかんに湯をわかしていた。

「今晚。」とすみ子は軽く挨拶をして右側のはずれから二番目の扉とを鍵であけた。

畳のよごれた六畳ほどの部屋で、一方は押入、一方の壁際には箆筒たんす、他の壁には浴衣ゆかたやボイルの寝間着がぶら下げである。すみ子は窓を明けて、「ここが涼しいわ。」と腰巻や足袋たびの下つている窓の下に座布団を敷いた。

「一人でこうしていれば全く気楽だな。結婚なんか全く馬鹿らしくなるわけだな。」

「家ではしょっちゅう帰つて来いッていうのよ。だけれど、もう駄目ねえ。」

「僕ももう少し早く覚醒すればよかつたのだ。今じゃもう晩おそい。」と種田は腰巻の干してある窓越しに空の方を眺めたが、思出したように、「

「明間あきまがあるか、きいてくれないか。」

すみ子は茶を入れるつもりと見えて、湯わかしを持ち、廊下へ出て何やら女同士で話をしていたが、すぐ戻つて来て、

「向むこうの突当りが明いているそうです。だけれど今夜は事務所のおばさんがいないんですとさ。」

「じゃ、借りるわけには行かないな。今夜は。」

「一晩や二晩、ここでもいいじゃないの。あんたさえ構わなければ。」

「おれはいいが。あんたはどうする。」と種田は眼を円くした。

「わたし。此処こゝに寝るわ。お隣りの君ちゃんのとこへ行ってもいいのよ。彼氏が来ていなければ。」

「あんたの処とこは誰も来ないのか。」

「ええ。今のところ。だから構わないのよ。だけれど、先生を誘惑してもわるいでしょ。」

種田は笑いたいような、情ないような一種妙な顔をしたまま何も言わない。「

「立派な奥さんもお嬢さんもいらっしやるんだし……。」

「いや、あんなもの。晩時おそまきでもこれから新生涯に入るんだ。」

「別居なさるの。」

「うむ。別居。むしろ離別さ。」

「だって、そうはいかないでしょう。なかなか。」

「だから、考えているんだ。乱暴でも何でもかまわない。一時姿を晦くすんだな。そうすれば決裂の糸口がつくだろうと思うんだ。すみ子さん。

明部屋のはなしが付かなければ、迷惑をかけても済まないから、僕は今夜だけ何処どこかで泊ろう。玉の井でも見物しよう。」

「先生。わたしもお話したいことがあるのよ。どうしようかと思って困ってる事があるのよ。今夜は寝ないで話をして下さらない。」

「この頃はじき夜があけるからね。」

「このあいだ横浜までドライブしたら、帰り道には明るくなったわ。」

「あんたの身上話は、初めツから聞いたら、女中で僕の家いえへ来るまでも大変なものだろう。それから女給になってから、未だ先があるんだからな。」

「一晩じゃ足りないかも知れないわね。」

「全く……。ははははは。」

一時寂ひとしきりしんとしていた二階のどこやらから、男女の話声が聞え出した。炊事場ではまたしても水の音がしている。すみ子は真実夜通し話をするつもりと見えて、帯だけ解いて丁寧に畳み、足袋をその上に載せて押入にしまい、それから茶ぶ台の上を拭ふきなお直して茶を入れながら、

「わたしのこうなった訳、先生は何だと思って。」

「さア、やっぱり都会のあこがれだと思っただが、そうじゃないのか。」

「それも無論そうだけれども、それよりか、わたし父の商売が、とてもいやだったの。」

「何だね。」

「親分とか侠客きやうかくとかいっうんでしよう。とにかく暴力団……。」とすみ子は声を低くした。

五

梅雨つゆがあけて暑中になると、近鄰の家の障子が一斉に明け放されるせいでもあるか、他の時節には聞えなかった物音が俄にわかに耳立ってきこえて来る。物音の中で最もわたくしを苦しめるものは、板堀一枚を隔てた鄰家のラデオである。

夕方少し涼しくなるのを待ち、燈下の机に向おうとすると、丁度その頃から亀裂ひびの入ったような鋭い物音が湧起って、九時過ぎてからでなくては駄やまない。この物音の中でも、殊はなはだに甚しくわたくしを苦しめるものは九州弁の政談、浪花節なにわぶし、それから学生の演劇に類似した朗読に洋楽を取り交ぜたものである。ラデオばかりでは物足らないと見えて、昼夜時間をかまわず蓄音機はやくじうたで流行唄はやりうたを鳴し立てる家もある。ラデオの物音を避けるために、わたくしは毎年夏まいとしになると夕飯ゆうめしもそこそこに、或時は

夕飯も外で食うように、六時を合図にして家を出ることにしている。ラ
 デイオは家を出れば聞えないというわけではない。道端の人家や商店か
 らは一段烈しい響が放たれているのであるが、電車や自動車の響と混淆
 して、市街一般の騒音となつて聞えるので、書齋に孤坐している時にく
 らべると、歩いている時の方がかえつて気にならず、よほど楽である。
 『失踪』の草稿は梅雨があけると共にラデイオに妨げられ、中絶して
 からもう十日あまりになつた。どうやらそのまま感興も消え失せてしま
 いそうである。

今年の夏も、昨年また一昨年と同じように、毎日まだ日の没しない中
 から家を出るが、実は行くべきところ、歩むべきところがない。神代帚
 葉翁（しんしろ）が生きていた頃には毎夜欠かさぬ銀座の夜涼みも、一夜ごとに興味
 の加るほどであつたのが、その人も既に世を去り、街頭の夜色にも、わ
 たくしはもう飽果てたような心持になっている。これに加えて、その後
 銀座通にはうっかり行かれないような事が起つた。それは震災前新橋の
 芸者家に入出入していたという車夫が今は一見して人殺してもしたことの
 ありそうな、人相と風体の悪い破落戸になつて、折節尾張町辺を徘徊し、
 むかし見覚えのあるお客の通るのを見ると無心難題を言いかける事であ
 る。

最初黒沢商店の角で五拾銭銀貨を恵んだのがかえつて悪い例となり、
 恵まれぬ時は悪声を放つので、人だかりのするのが厭さにまた五拾銭を
 やるようになってしまふ。この男に酒手の無心をされるのはわたくしは
 かりではあるまいと思つて、或晩欺いて四辻の派出所へ連れて行くと、
 立番の巡査とはとうに馴染になつていて、巡査は面倒臭さに取り合つて
 くれる様子をも見せなかつた。出雲町……イヤ七丁目の交番でも、或日
 巡査と笑いながら話をしてのを見た。巡査の眼にはわたくしなどよ

りこの男の方がかえって素性が知れているのかも知れない。

わたくしは散策の方面を隅田河の東に替え、溝際とみぎわの家に住んでいるお雪という女をたずねて憩やすむことにした。

四、五日つづけて同じ道を往復すると、麻布からの遠道も初めに比べると、だんだん苦にならないようになる。京橋と雷門かみなりもんとの乗替のりかえも、習慣になると意識よりも身体からだの方が先に動いてくれるので、さほど煩しいとも思わないようになる。乗客の雑沓ざつとつする時間や線路が、日によって違ふことも明あきらになるので、これを避けさえすれば、遠道だけにゆっくり本を讀みながら行くことも出来るようになる。

電車なかの内での読書は、大正九年の頃眼鏡を掛けるようになってから全く廃せられていたが、雷門までの遠道を往復するようになって再びこれを行うことにした。しかし新聞も雑誌も新刊書も、手にする習慣がないので、わたくしは初めての出掛けには、手に触れるがまま依田よだがくかい学海の『溧水二十四景記』を携たずえて行つた。

長堤蜿蜒。經三田祠稍成彎狀。至長命寺。

一折為桜樹最多処。寛永中徳川大猷公放鷹於此。

会腹痛。飲寺井而癒。曰。是長命水也。因名其井。

竝及寺号。後有芭蕉居士賞雪佳句。繪炙人口。

嗚呼公絶代豪傑。其名震世。宜矣。

居士不過一布衣。同伝於後。蓋人在所樹立何如耳。

先儒の文は目前の景に対して幾分の興を添えるだろうと思つたからである。

わたくしは三日目ぐらいには散歩の途みちすがら食料品を買わねばならない。わたくしはそのついでに、女に贈る土産物みやげものをも買った。この事が往訪すること僅わずかに四、五回にして、二重の効果を収めた。

いつも鑑詰ばかり買うのみならず、シャツや上着もボタンの取れたのを着ているのを見て、女はいよいよわたくしをアパート住いの独者と推定したのである。独身ならば毎夜のように遊びに行っても一向不審はないという事になる。ラディオのために家にいられないと思うはずもなからうし、また芝居や活動を見ないので、時間を空費するところがない。行く処がないので来る人だとも思うはずがない。この事は言訳をせずとも自然にうまく行ったが、金の出処について疑いをかけられはせぬかと、場所柄だけに、わたくしはそれとなく質問した。すると女はその晩払うものさえ払ってくれば、他の事はてんで考えてもいないという様子で、「こんな処でも、遣う人は随分遣うわよ。まる一ト月居続けたお客があつたわ。」

「へえ。」とわたくしは驚き、「警察へ届けなくっていいのか。吉原なんかだとじき届けるという話じゃないか。」

「この土地でも、家によつちアするかも知れないわ。」

「居続したお客は何だった。泥棒か。」

「呉服屋さんだったわ。とうとう店の檀那が来て連れて行ったわ。」

「勘定の持ち逃げだね。」

「そうでしょう。」

「おれは大丈夫だよ。その方は。」と言ったが、女はどちらでも構わないという顔をして聞返しもしなかった。

しかしわたくしの職業については、女の方ではとうから勝手に取りきめていらしい事がわかって来た。

二階の襖に半紙四ツ切ほどの大きさに復刻した浮世絵の美人画が張交にしてある。その中には歌麿呂の鮎取り、豊信の入浴美女など、かつてわたくしが雑誌『此花』の挿絵で見覚えていたものもあつた。北斎の三

冊本、『福德和合人』の中から、男の姿を取り去り、女の方ばかりを残したのもあつたので、わたくしは委しくこの書の説明をした。それからまた、お雪がお客と共に二階へ上がっている間、わたくしは下の一ト間で手帳へ何か書いていたのを、ちらと見て、てつきり秘密の出版を業とする男だと思つたらしく、こん度来る時そういう本を一冊持つて来てくれと言出した。

家には二、三十年前に集めたものの残りがあつたので、請われるまま三、四冊一度に持つて行つた。ここに至つて、わたくしの職業は言わず語らず、それと決められたのみならず、悪銭の出処もおのずから明瞭になつたらしい。すると女の態度は一層打解けて、全く客扱いをしないようになつた。

日蔭に住む女たちが世を忍ぶ後暗い男に対する時、恐れもせず嫌いもせず、必ず親密と愛憐との心を起す事は、夥多の実例に徴して深く説明するにも及ぶまい。鴨川の芸妓は幕吏に追われる志士を救い、寒駅の酌婦は関所破りの博徒に旅費を恵むことを辞さなかつた。トス力は逃竄の貧士に食を与え、三千歳は無頼漢に恋愛の真情を捧げて悔いなかつた。

ここにおいてわたくしの憂慮するところは、この町の付近、もしくは東武電車の中などで、文学者と新聞記者とに出会わぬようにする事だけである。この他の人たちには何処で会おうと、後をつけられようと、一向に差問はない。謹厳な人たちからは年少の頃から見限られた身である。親類の子供もわたくしの家には寄りつかないようになっていいるから、今では結局憚るものはない。ただ独恐るべきは操觚の士である。十余年前銀座の表通に頻にカフェーが出来はじめた頃、ここに酔を買った事から、新聞という新聞は拳つてわたくしを筆誅した。昭和四年の四月『文芸春秋』という雑誌は、世に「生存させて置いてはならない」人間としてわ

たくしを攻撃した。その文中には「処女誘拐」というが如き文字をも使
用した所を見るとわたくしを陥れて犯法の罪人たらしめようとしたもの
かも知れない。彼らはわたくしが夜窃に溼水をわたつて東に遊ぶ事を探
知したなら、更に何事を企図するか測りがたい。これ真に恐るべきであ
る。

毎夜電車の乗降りのみならず、この里へ入込んでからも、夜店の賑う
表通りは言うまでもない。路地の小径も人の多い時には、前後左右に気
を配つて歩かなければならない。この心持は『失踪』の主人公種田順平
が世をしのぶ境遇を描写するには必須の実験であろう。

六

わたくしの忍んで通う溝際つぼぎわの家が寺島町七丁目六十何番地にあること
は既に識した。この番地のあたりはこの盛場さかじばでは西北の隅に寄つたこと
ろで、目貫めぬきの場所ではない。仮にこれを北里きたに譬えて見たら、京町一丁
目も西河岸にしがしに近いはずれとでも言うべきものであろう。聞いたばかりの
話だから、ちよつと通めかしてこの盛場の沿革を述べようか。大正七、
八年の頃、浅草観音堂裏手の境内が狭められ、広い道路が開かれるに際
して、むかしからその辺に櫛比しつひしていた楊弓場銘酒屋やまゆきのたぐいが悉く取
払いを命ぜられ、現在いまでも京成バスの往復している大正道路の両側に処
定めず店を移した。つづいて伝法院でんぼういんの横手や江川玉乗りの裏あたりから
も追われて来るものが引きも切らず、大正道路は殆軒並銘酒屋ほとんどになつて
しまい、通行人は白昼でも袖を引かれ帽子を奪われるようになったので、
警察署の取締りが厳しくなり、車の通る表通りから路地の内へと引き込
ませられた。浅草の旧地では凌雲閣りょううんかくの裏手から公園の北側千束町せんそくまちの路地

にあつたものが、手を尽くして居残りの策を講じていたが、それも大正十二年の震災のために中絶し、一時悉くこの方面へ逃げて来た。市街再建の後西見番にしけんばんと称する芸者家組合をつくり転業したのもあつたが、この土地の繁栄はますます盛になり遂に今日の如き半ば永久的な状況を呈するに至つた。初め市中との交通は白髻橋しろむしはしの方面一筋だけであつたので、去年京成電車が運転を廃止する頃まではその停留場ていりゅうばに近いところが一番賑にぎやかであつた。

しかるに昭和五年の春都市復興祭の執行せられた頃、吾妻橋あづまはしから寺島町に至る一直線の道路が開かれ、市内電車は秋葉神社前まで、市営バスの往復は更に延長して寺島町七丁目のはずれに車庫を設けるようになった。それと共に東武鉄道会社が盛場の西南に玉の井駅を設け、夜も十二時まで雷門かみなりもんから六銭で人を載せて来るに及び、町の形成は裏と表と、全く一変するようになった。今まで一番わかりにくかつた路地が、一番入りやすくなつた代り、以前目貫と言われた処が、今では端はたれになつたのであるがそれでも銀行、郵便局、湯屋、寄席よせ、活動写真館、玉の井稻荷いなづの如きは、いずれも以前のまま大正道路に残つていて、俚俗りぞく広小路、または改正道路と呼ばれる新しい道には、円タクの輻輳ふくそうと、夜店の賑いとを見るばかりで、巡査の派出所も共同便所もない。このような辺鄙へんびな新開町にあつてすら、時勢に伴う盛衰の変は免れないのであつた。いわんや人の一生においてをや。

わたくしがふと心易こころやすくなつた溝際みぞぎの家……お雪という女の住む家が、この土地では大正開拓期の盛時を想起しおこさせる一隅にあつたのも、わたくしの如き時運に取り残された身には、何やら深い因縁があつたように思われる。その家は大正道路から唯とある路地に入り、汚れた幟ほしの立っ

る伏見稻荷の前を過ぎ、溝に沿うて、なお奥深く入り込んだ処にあるので、表通のラデオや蓄音機の響も素見客の足音に消されてよくは聞えない。夏の夜、わたくしがラデオのひびきを避けるにはこれほど適した安息処は他にはあるまい。

一体この盛場では、組合の規則で女が窓に坐る午後四時から蓄音機やラデオを禁じ、また三味線をも弾かせないという事で。雨のしとしとと降る晩など、ふけるにつれて、ちよいとちよいとの声も途絶えがちになると、家の内外に群り鳴く蚊の音が耳立って、いかにも場末の裏町らしい侘しさが感じられて来る。それも昭和現代の陋巷ではなくして、鶴屋南北の狂言などから感じられる過去の世の裏淋しい情味である。

いつも島田か丸鬚にしか結っていないお雪の姿と、溝の汚さと、蚊の鳴声とはわたくしの感覚を著しく刺激し、三、四十年むかしに消え去った過去の幻影を再現させてくれるのである。わたくしはこの果敢くも怪し気なる幻影の紹介者に対して出来得ることならあからさまに感謝の言葉を述べたい。お雪さんは南北の狂言を演じる俳優よりも、蘭蝶を語る鶴賀なにがしよりも、過去を呼返す力においては一層巧妙なる無言の芸術家であった。

わたくしはお雪さんが飯櫃を抱きかかえるようにして飯をよそい、さらさら音を立てて茶漬を挿込む姿を、あまり明くない電燈の光と、絶えざる溝蚊の声の中にじつと眺めやる時、青春のころ狎れ親しんだ女たちの姿やその住居のさまをありありと目の前に思浮べる。わたくしのものでばかりでない。友達の女の事までが思出されて来るのである。

そのころには男を「彼氏」といい、女を「彼女」とよび、二人の侘住居を「愛の巢」などという言葉はまだ作り出されていなかった。馴染の女は「君」でも、「あんた」でもなく、ただ「お前」といえばよかった。

亭主は女房を「おつかア」女房は亭主を「ちゃん」と呼ぶものもあつた。溝の蚊の唸る声は今日にあつても隅田川を東に渡って行けば、どうやら三十年前のむかしと変りなく、場末の町のわびしさを歌っているのに、東京の言葉はこの十年の間に変れば実に変つたものである。

そのあたり片づけて吊る蚊帳哉

さらぬだに暑くるしきを木綿蚊帳

家中は秋の西日や溝のふち

わび住みや団扇も折れて秋暑し

蚊帳の穴むすびむすびて九月哉

屑籠の中からも出て鳴く蚊かな

残る蚊をかぞへる壁や雨のしみ

この蚊帳も酒とやならむ暮の秋

これはお雪が住む家の茶の間に、或夜蚊帳が吊つてあつたのを見て、ふと思出した旧作の句である。半ば亡友唾々君が深川長慶寺裏の長屋に親の許さぬ恋人と隠れ住んでいたのを、その折々訪ねて行つた時よんだもので、明治四十三、四年のころであつたらう。

その夜お雪さんは急に齒が痛くなつて、今しがた窓際から引込んで寝たばかりのところだと言いながら蚊帳から這い出したが、坐る場処がないので、わたくしと並んで上櫃へ腰をかけた。

「いつもより晚いじゃないのさ。あんまり、待たせるもんじゃないよ。」女の言葉遣いはその態度と共に、わたくしの商売が世間を憚るものと

推定せられてから、狎昵の境を越えてむしろ放濫に走る嫌いがあつた。

「それはすまなかつた。虫齒か。」

「急に痛くなつたの。目がまわりそうだったわ。腫れてるだろう。」と横顔を見せ、「あなた。留守番していて下さいな。わたし今の中歯医者へ行つて来るから。」

「この近処か。」

「検査場のすぐ手前よ。」

「それじゃ公設市場の方だろう。」

「あなた。方々歩くと見えて、よく知ってるんだねえ。浮気者。」

「痛い。そう邪慳にするもんじゃない。出世前の身体だよ。」

「じゃ頼むわよ。あんまり待たせるようだったら帰つて来るわ。」

「お前待ち待ち蚊帳の外……というわけか。仕様がな。」

わたくしは女の言葉遣いがぞんざいになるに従つて、それに適応した調子を取るようになっている。これは身分を隠そうがための手段ではない。

処と人とを問わず、わたくしは現代の人と応接する時には、あたかも外

国に行つて外国語を操るように、相手と同じ言葉を遣う事に行っているか

らである。「おらが国」と向の人が言つたらこつちも「おら」を「わた

くし」の代りに使う。説話は少し余事にわたるが、現代人と交際する時、

口語を学ぶことは容易であるが文書の往復になると頗困難を感じる。殊

に女の手紙に返書を裁する時「わたし」を「あたし」となし、「けれど

も」を「けど」となし、また何事につけても、「必然性」だの「重大性」

だのと、性の字をつけて見るのも、冗談半分口先で真似をしている時と

はちがつて、これを筆にする段になると、実に堪がたい嫌悪の情を感じ

なければならぬ。恋しきは何事につけても遷らぬむかしで、あたかも

その日、わたくしは虫干をしていた物の中に、柳橋の妓にして、向嶋小

梅の里に囲われていた女の古い手紙を見た。手紙には必ず候文を用いな

ければならなかつた時代なので、その頃の女は、硯を引寄せ筆を乗れば、

文字を知らなくとも、おのずから候べく候の調子を思出したものらしい。わたくしは人の嗤笑を顧ず、これをここに録したい。

一筆申上まゐらせ候。その後は御ぶさた致し候て、
何とも申わけ無之御免下されたく候。

私事これまでの住居誠に手ぜまに付

この中右のところへしき移り候まま御知らせ申上候。

まことにまことに申上かね候へども、

少々お目もじの上申上たき事御ざ候間、

何とぞ御都合なし下されて、

あなた様のよろしき折御立より下されたく

幾重にも御待申上候。一日も早く御越しのほど、

先は御めもじの上にあらあらかしこく。より

竹屋の渡しの下にみやこ湯と申す湯屋あり。

八百屋でお聞き下さい。

天氣がよろしく候故御都合にて唾々さんもお誘ひ合され

堀切へ参りたくと存候間御しる前からいかがに候や。

御たづね申上候。尤この御返事御無用にて候。

文中「ひき移り」を「しき移り」となし、「ひる前」を「しる前」に
書き誤っているのは東京下町言葉の訛りである。竹屋の渡しも今は枕橋
の渡と共に廃せられてその跡もない。我青春の名残を弔うに今はこれを
那邊に探るべきか。

わたくしはお雪の出で行った後、半おろした古蚊帳の裾に坐つて、一人蚊を追いながら、時には長火鉢に埋めた炭火と湯わかしとに気をつけた。いかに暑さの烈しい晩でも、この土地では、お客の上った合図に下から茶を持って行く習慣なので、どの家でも火と湯とを絶した事がない。「おい。おい。」と小声に呼んで窓を叩くものがある。

わたくしは大方馴染の客であろうと思ひ、出ようか出まいかと、様子を窺つていると、外の男は窓口から手を差入れ、猿をはずして扉をあけて内へ入った。白っぽい浴衣の兵児帯をしめ、田舎臭い円顔に口髭を生した年は五十ばかり。手には風呂敷に包んだものを持っている。わたくしはその様子とその顔立とで、直様お雪の抱主だろうと推察したので、向から言うのを待たず、

「お雪さんは何だか、お医者へ行くつて、今おもてで逢いました。」

抱主らしい男は既にその事を知っていたらしく、「もう帰るでしょう。待つていなさい。」といつて、わたくしのいたのを怪しむ風もなく、風呂敷包を解いて、アルミの小鍋を出し茶棚の中へ入れた。夜食の惣菜を持って来たのを見れば、抱主に相違はない。

「お雪さんは、いつも忙しくつて結構ですなえ。」

わたくしは挨拶のかわりに何かお世辞を言わなければならぬと思つて、そう言つた。

「何ですか。どうも。」と抱主の方でも返事に困るといったような、意味のない事を言つて、火鉢の火や湯の加減を見るばかり。面と向かつてわたくしの顔さえ見ない。むしろ対談を避けるというように横を向いているので、わたくしもそのまま黙つていた。

こういう家の亭主と遊客と対面は、両方とも甚気まずいものである。

貸座敷、待合茶屋、芸者屋などの亭主と客との間もまた同じことで、この両者の対談する場合は、必ず女を中心にしてその気まずい紛擾の起つた時で、しからざる限り対談の必要が全くないからでもあるう。

いつもお雪が店口で焚く蚊遣香も、今夜は一度もともされなかつたと見え、家中にわめく蚊の群は顔を刺すのみならず、口の中へも飛込もうとするのに、土地馴れているはずの主人も、暫く坐っている中我慢がしきれなくなつて、中仕切の敷居際に置いた扇風機の引手を捻つたが破れていると見えて廻らない。火鉢の抽斗から漸く蚊遣香の破片を見出した時、二人は思わず安心したように顔を見合せたので、わたくしはこれを機会に、

「今年はどこもひどい蚊ですよ。暑さも格別ですがね。」と言うと、
「そうですか。ここはもともと埋地で、碌に地揚もしないんだから。」
と主人もしぶしぶ口をきき初めた。

「それでも道がよくなりましたね。第一便利になりましたね。」

「その代り、何かにつけて規則がやかましくなった。」

「そう。二、三年前にや、通ると帽子なんぞ持つて行ったものですね。」

「あれにや、わたしたちこの中の者も困つたんだよ。用があつても通れないからね。女たちにそう言つても、そう一々見張りをしてもいられないし、仕方がないから罰金を取るようにしたんだ。店の外へ出てお客をつかまえる処を見つかりと四十二円の罰金だ。それから公園あたりへ客引を出すのも規則違反にしたんだ。」

「それも罰金ですか。」

「うむ。」

「それは幾何ですか。」

遠廻しに土地の事情を聞出そうと思つた時、「安藤さん」と男の声で、

何やら何やら紙片かみきれを窓に差入れて行った者がある。同時にお雪が帰って来て、その紙を取上げ、猫板の上に置いたのを、偷見ぬすみみすると、腊写摺ろうしやくずりにした強盗犯人搜索の回状である。

お雪はそんなものには目も触れず、「お父さん、あした抜かなくっちゃいけないっていうのよ。この齒。」と言って、主人の方へ開いた口あを向ける。

「じゃア、今夜は食べる物はいらなかったな。」と主人は立ちかけたが、わたくしはわざと見えるように金を出してお雪にわたし、一人先へ立つて二階に上った。

二階は窓のある三疊の間に茶ぶ台を置き、次が六疊と四疊半位の二間ふたましかない。一体この家はもと一軒であったのを、表と裏と二軒に仕切つたらしく、下は茶の間の一室きりで台所も裏口もなく、二階は梯子はしの降口からつづいて四疊半の壁も紙を張った薄い板一枚なので、裏どなりの物音や話声が手に取るようによく聞える。わたくしは能く耳よを押つけて笑う事があつた。

「また、そんなとこ。暑いのにさ。」

上つて来たお雪はすぐ窓のある三疊の方へ行つて、染模様の剥はげたカーテンを片寄せ、「こつちへおいでよ。いい風だ。アラまた光つてる。」
「さつきより幾らか涼しくなったな、なるほどいい風だ。」

窓のすぐ下は日蔽ひおひの葭簀よしすに遮られているが、溝みちの向側に並んだ家の二階と、窓口に坐っている女の顔、往いつたり来たりする人影、路地一帯の光景は案外遠くの方まで見通すことができる。屋根の上の空は鉛色に重く垂下たれさがつて、星も見えず、表通のネオンサインに半空なかぞらまでも薄赤く染められているのが、蒸暑い夜を一層蒸暑くしている。「ねえ、あなた」と突然わたくしの手を握り、「わたし、借金を返しちまったら。あなた、

おかみさんにしてくれない。」

「おれ見たようなもの。仕様がなないじゃないか。」

「ハスになる資格がないっていうの。」

「食べさせることができなかったら資格がないね。」

お雪は何とも言わず、路地のはずれに聞え出したヴィヨロンの唄につれて、鼻唄をうたいかけたので、わたくしは見るともなく顔をみようとすると、お雪はそれを避けるように急に立上り、片手を伸して柱につきまわり、乗り出すように半身を外へ突き出した。

「もう十年わかかりやア……。」わたくしは茶ぶ台の前に坐って巻煙草に火をつけた。

「あなた。一体いくつなの。」

こなたへ振向いたお雪の顔を見上ると、いつものように片脛かたえくぼを寄せているので、わたくしは何とも知れず安心したような心持になって、

「もうじき六十さ。」

「お父さん。六十なの。まだ御丈夫。」

お雪はしげしげとわたくしの顔を見て、「あなた。まだ四十二にやならないね。三十七か八か知ら。」

「おれはお妾めかけさんに出来た子だから、ほんとの年はわからない。」

「四十にしても若いね。髪の毛なんぞそうは思えないわ。」

「明治三十一年生生まれだね。四十だと。」

「わたしはいくつ位に見えて。」

「二十一、二に見えるが、四ぐらいかな。」

「あなた。口がうまいから駄目。二十六だわ。」

「雪ちゃん、お前、宇都うつの宮みやで芸者をしていたって言ったね。」

「ええ。」

「どうして、ここへきたんだ。よくこの土地の事を知っていたね。」

「暫く東京にいたもの。」

「お金のいることがあったのか。」

「そうでもなけりやア……。檀那だんなは病気で死んだし、それに少し……」

「馴れない中は驚いたろう。芸者とはやり方がちがうから。」

「そうでもないわ。はじめツから承知で来たんだもの。芸者は掛かりまけ

がして、借金の抜ける時がないもの。それに……身を落とすなら稼かせぎい

い方が結句徳だもの。」

「そこまで考えたのは、全くえらい。一人でそう考えたのか。」

「芸者の時分、お茶屋の姐ねえさんと知ってる人が、この土地で商売しているから、話をきいたのよ。」

「それにしても、えらいよ。年ねんがあけたら少し自前じまえで稼いで、残せるだけ残すんだね。」

「わたしの年は水商売には向くんだとき。だけれど行先の事はわからな
いわ。ネエ。」

じつと顔を見詰められたので、わたくしは再び妙に不安な心持がした。
まさかとは思うものの、何だか奥歯に物の挟はさまっているような心持がして、此度こんどはわたくしの方が空の方へでも顔を外そむ向けたくなった。

表通りのネオンサインが反映する空のはずれには、先ほどから折々稲妻いなづまが閃ひらいていたが、この時急に鋭い光が人の目を射た。しかし雷の音らしいものは聞えず、風がぱったり歇やんで日の暮の暑さがまたむし返されて来たようである。

「いまに夕立が来そうだな。」

「あなた。髪結かみゆいさんの帰り……もう三月みつきになるわネエ。」

わたくしの耳にはこの「三月になるわネエ。」と少し引延ばしたネエ

の聲が何やら遠いむかしを思返すとてもいっような無限の情じやうを含んだように聞きなされた。「三月になります。」とか「なるわよ。」とか言切つたら平常つねの談話に聞えたのであろうが、ネエと長く引いた声は詠嘆おんの音おんというよりも、むしろそれとなくわたくしの返事を促すために遣われたもののようにも思われたので、わたくしは「そう……。」と答えかけた言葉さえ飲み込んでしまつて、ただ目容まなざしで応答をした。

お雪は毎夜路地へ入はいり込む数知れぬ男に応接する身でありながら、どういふ訳で初めてわたくしと逢つた日の事を忘れずにいるのか、それがわたくしには有り得べからざる事のように考えられた。初ての日を思返すのは、その時の事を心に嬉しく思うがためと見なければならぬ。しかしわたくしはこの土地の女がわたくしのような老人としよりに対して、尤も先方もつとではわたくしの年を四十歳位に見ているが、それにしても好いたの惚ほれれたのといっようなもしくはそれに似た柔あたたかく温あたたかな感情を起し得るものとは、夢にも思つていなかった。

わたくしが殆ど毎夜のように足繁く通つて来るのは、既に幾度か記述したように、種々いろいろな理由があつたからである。創作『失踪しっそう』の实地観察。ラデオからの逃走。銀座丸ノ内のような首都枢要の市街に対する嫌悪。その他の理由もあるが、いずれも女に向つて語り得べき事ではない。わたくしはお雪の家を夜の散歩の休憩所あてにしていたに過ぎないのであるが、そうするためには方便として口から出まかせの虚言うそもついた。故意に欺くつもりではないが、最初女の誤り認めた事を訂正もせず、むしろ興にまかせてその誤認をなお深くするよつな拳動けんどうや話をして、身分みぶんを晦くした。この責だけはまぬがれないかも知れない。

わたくしはこの東京のみならず、西洋にあつても、売笑ちまたの巷ほかの外ほとんど、殆たいていその他の社会を知らないといつてもよい。その由来はここに述べたくも

なく、また述べる必要もあるまい。もしわたくしなる一人物の何者たるかを知りたいというような酔興な人があつたなら、わたくしが中年のころにつくつた対話『昼すぎ』漫筆『妾宅』小説『見果てぬ夢』の如き悪文を一読せられたなら思い半なかばに過るものがあるう。とは言うものの、それも文章が拙つたなく、くどくどしくて、全篇をよむには面倒であるうから、ここに『見果てぬ夢』の一節を抜摘しよう。「彼が十年一日の如く花柳界に出入する元氣のあつたのは、つまり花柳界が不正暗黒の巷である事を熟知していたからで。さればもし世間が放蕩者ほうとうしゃを以て忠臣孝子の如く称賛するものであつたなら、彼は邸宅を人手に渡してまでも、その称賛の声を聞こうとはしなかつたであろう。正当な妻女の偽善的虚栄心、公明なる社会の詐欺的活動に対する義憤は、彼をして最初から不正暗黒として知られた他の一方に馳はせ赴おもむかした唯一の力であつた。つまり彼は真白だと称する壁の上に汚なまい種なま々な汚点しみを見出すよりも、投捨なげてられた襪は襪らの片きれにも美しい縁取りの残りを発見して喜ぶのだ。正義の宮殿にも往々にして鳥や鼠の糞ふんが落ちていると同じく、悪徳の谷底には美しい人情の花と香かしい涙の果実がかえつて沢山に摘み集められる。」

これを読む人は、わたくしが溝の臭気と、蚊の声との中に生活する女たちを深く恐れもせず、醜みにくいともせず、むしろ見ぬ前から親しみを覚えていた事だけは推察せられるであろう。

わたくしは彼女かのおんなたちと懇意になるには 少くとも彼女たちから敬して遠ざけられないためには、現在の身分はかくしている方がよいと思つた。彼女たちから、こんな処へ来ずともよい身分の人だのに、と思われるのは、わたくしに取つてはいかにも辛い。彼女たちの薄倖はな生活を芝居でも見るように、上から見下みくだしてよろこぶのだと誤解せられるような事は、出来得るかぎりこれを避けたいと思つた。それには身分を秘する

より外はない。

こんな処へ来る人ではないと言われた事については既に実例がある。或夜、改正道路のはずれ、市営バス車庫の辺ほとりで、わたくしは巡査に呼止められて尋問せられたことがある。わたくしは文学者だの著述業だの自分から名乗りを揚げるのも厭いやであるし、人からそう思われるのはなおさら嫌いであるから、巡査の問に対しては例の如く無職の遊民と答えた。巡査はわたくしの上着を剥取はぎとつて所持品を改める段になると、平素ふだん夜行の際、不審尋問に遇あう時の用心に、印鑑と印鑑証明書と戸籍抄本とが囊ふち中に入れてある。それから紙入には翌日の朝大工と植木屋と古本屋とに払いがあつたので、三、四百円の現金が入れてあつた。巡査は驚いたらしく俄にわかにわたくしの事を資産家とよび、「こんな処は君見たような資産家の来るところじゃない。早く帰りましたまえ、間違いがあるといかんから、来るなら出直して来たまえ。」と行って、わたくしがなお愚図愚図しているのを見て、手を挙げて円タクを呼止め、わざわざ戸を明けてくれた。わたくしはやむことをえず自動車に乗り改正道路から環状線とかいう道を廻まわつた。つまり迷宮ラビリントの外郭を一周して、伏見ふしみ稻荷いなりの路地口に近いところで降りた事があつた。それ以来、わたくしは地図を買つて道を調べ、深夜は交番の前を通らないようにした。

わたくしは今、お雪さんが初めて逢つた日の事を詠嘆的な調子で言出したのに対して、答うべき言葉を見付けかね、煙草の烟けむりの中にせめて顔だけでもかくしたい気がしてまたもや巻煙草を取出した。お雪は黒目がちの目でじつとこなたを見詰めながら、

「あなた。ほんとに能く肖よてにいるわ。あの晩、あたし後姿を見た時、はつと思つたくらい……。」

「そうか。他人のそら肖よつて、よくある奴さ。」わたくしはまあ好かつ

たという心持を一生懸命に押隠した。そして、「誰に。死んだ檀那に似ているのか。」

「いいえ。芸者になつたばかりの時分……。一緒になれなかつたら死のうと思つたの。」

「逆上^{さか}せきると、誰しも一時はそんな気を起す……。。」

「あなたも。あなたなんぞ、そんな氣にやアならないでしょう。」

「冷静かね。しかし人は見掛によらないもんだからね。そう見くびつたもんでもないよ。」

お雪は片臙^{かたえくぼ}を寄せて笑顔をつくつたばかりで、何とも言わなかつた。

少し下唇^{くちびる}の出た口尻^{くちじり}の右側に、おのずと深く穿^{うが}たれる片えくぼは、いつもお雪の顔立を娘のようにあどけなくするのであるが、その夜にかぎつて、いかにも無理に寄せた臙のように、言い知れず淋しく見えた。わたくしはその場をまぎらすために、

「また齒がいたくなつたのか。」

「いいえ。さつき注射したから、もう何ともない。」

それなり、また話が途絶えた時、幸にも馴染^{なじみ}の客らしいものが店口の戸を叩いてくれた。お雪はつと立って窓の外に半身を出し、目かくしの板越しに下を覗^{のぞ}き、

「アラ竹さん。お上んなさい。」

駆け降りる後^{あと}からわたくしも続いて下り、暫^{しばし}く便所の中に姿をかくし客の上つてしまふのを待って、音のしないように外へ出た。

八

来そうに思われた夕立も来る様子はなく、火種^{たや}を絶さぬ茶の間の蒸暑

さと蚊の群むれとを恐れて、わたくしは一時外へ出たのであるが、帰るにはまだ少し早いらしいので、溝どぶづたいに路地を抜け、ここにも板橋のかかっている表の横町に出た。両側に縁日商人あきんどが店を並べているので、もともと自動車の通らない道幅はなおさら狭くなって、出さかる人は押合いながら歩いていく。板橋の右手はすぐ角に馬肉屋のある四辻よつ辻で。辻の向側には曹洞宗東清寺じょうどうしゅうせいじと刻した石碑と、玉の井稻荷いなりの鳥居と公衆電話とが立っている。わたくしはお雪の話からこの稻荷の縁日は月の二日と二十日の両日である事や、縁日の晩は外ばかり賑にぎで、路地の中はかえって客足が少いところから、窓の女たちは貧乏稻荷と呼んでいる事などを思出し、人込みに交って、まだ一度も参詣したことの無い祠やしろの方へ行つて見た。

今まで書くことを忘れていたが、わたくしは毎夜この盛場さかしばへ出掛けるように、心持にも身体にも共々に習慣がつくようになってから、この辺あたりの夜店を見歩いている人たちの風俗に倣ならって、出がけには服装みなりを変えることにしていたのである。これは別に手数てすうのかかる事ではない。襟えりの返る縞しまのホワイトシャツの襟元のぼたんをはずして襟飾をつけない事、洋服の上着は手に提さげて着ない事、帽子はかぶらぬ事、髪の毛は櫛くしを入れた事もないように掻かき乱みだして置く事、ズボンはあるべく膝ひざや尻しりの摺すり切れたくらいな古いものに穿替はきかえる事。靴は穿かず、古下駄ふるげたも踵かかとの方が台まで摺りへっているのを捜して穿く事、煙草は必バツトに限る事、エトセトラエトセトラである。だから訳はない。つまり書齋すしやにいる時、また来客を迎える時の衣服をぬいで、庭掃除すずはらいや煤すす払はらいの時のものに着替え、下女の古下駄を賣うってはけばよいのだ。

古ズボンに古下駄をはき、それに古手拭てすぎをさがし出して鉢巻はちまきの巻方も至極ぶいき不意ふいき気にすれば、南は砂町すなまち、北は千住せんじゆから葛西金町かさいかなまち辺まで行こうとも、道行く人から振返かえって顔を見られる気遣きづないはない。その町に住んで

いるものが買物にでも出たように見えるので、安心して路地へでも横町へでも勝手に入り込むことができる。この不様な身なりは、「じだらくに居れば涼しき二階かな。」で、東京の気候の殊に暑さの甚しい季節には最適している。朦朧円タクの運転手と同じようなこの風をしていれば、道の上といわず電車の中といわず何処でも好きな処へ啖唾も吐けるし、煙草の吸殻、マッチの燃残り、紙屑、バナナの皮も捨てられる。公園とみればベンチや芝生へ大の字なりに寝転んで軒をかこうが浪花節を唸ろうがこれまた勝手次第なので、ただに気候のみならず、東京中の建築物とも調和して、いかにも復興都市の住民らしい心持になることが出来る。

女子がアツパツパと称する下着一枚で戸外に出歩く奇風については、友人佐藤慵齋君の文集に載っているその論に譲って、ここには言うまい。

わたくしは素足に穿き馴れぬ古下駄を突掛けていたので、物に躓いたり、人に足を踏まれたりして、怪我をしないように気をつけながら、人ごみの中を歩いて向側の路地の突当りにある稻荷に参詣した。ここにも夜店がつづき、祠の横手のやや広い空地は、植木屋が一面に並べた薔薇や百合夏菊などの鉢物に時ならぬ花壇をつくっている。東清寺本堂建立の資金寄附者の姓名が空地の一隅に板塀の如くかけ並べてあるのを見ると、この寺は焼けたのでなければ、玉の井稻荷と同じく他所から移されたものかも知れない。

わたくしは常夏の花一鉢を買い、別の路地を抜けて、もと来た大正道路へ出た。すこし行くと右側に交番がある。今夜はこの辺の人たちと同じような服装をして、植木鉢をも手にしているから大丈夫とは思ったが、避けるに若くはないと、後戻りして、角に酒屋と水菓子屋のある道に曲った。

この道の片側に並んだ商店の後一帯の路地はいわゆる第一部と名付けられたラピアントで。お雪の家のある第二部を貫くかの溝は、突然第一部のはずれの道端に現われて、中島湯という暖簾を下げた洗湯の前を流れ、許可地外の真暗な裏長屋の間に行先を没している。わたくしはむかし北廓を取巻いていた鉄漿溝より一層不潔に見えるこの溝も、寺島町がまだ田園であった頃には、水草の花に蜻蛉のとまっていたような清い清流であったのであろうと、老人にも似合わない感傷的な心持にならざるを得なかった。縁日の露店はこの通には出ていない。九州亭というネオンサインを高く輝かしている支那飯屋の前まで来ると、改正道路を走る自動車の灯が見え蓄音機の音が聞える。

植木鉢がなかなか重いので、改正道路の方へは行かず、九州亭の四ツ角から右手に曲ると、この通は右側にはラピアントの一部と二部、左側には三部の一区劃が伏在している最も繁華な最も狭い道で、呉服屋もあり、婦人用の洋服屋もあり、洋食屋もある。ポストも立っている。お雪が髪結の帰り夕立に遇って、わたくしの傘の下に駆込んだのは、たしかこのポストの前あたりであった。

わたくしの胸底には先刻お雪が半冗談らしく感情の一端をほのめかした時、わたくしの覚えた不安がまだ消え去らずにいるらしい……わたくしはお雪の履歴については殆ど知るところがない。どこやらで芸者をしていたと言っているが、長唄も清元も知らないらしいので、それも確かだとは思えない。最初の印象で、わたくしは何の拠るところもなく、吉原か州崎あたりのさほどわるくない家にいた女らしい気がしたのが、かえって当たっているのではなからうか。

言葉には少しも地方の訛りが無いが、その顔立と全身の皮膚の綺麗なことは、東京もしくは東京近在の女でない事を証明しているので、わた

くしは遠い地方から東京に移住した人たちの間に生れた娘と見ている。

性質は快活で、現在の境涯をも深く悲しんではない。むしろこの境遇から得た経験を資本にして、どうにか身の振方をつけようと考えているだけの元気もあれば才智もあるらしい。男に対する感情も、わたくしの口から出まかせに言う事すら、そのまま疑わずに聴き取るところを見ても、まだ全く荒みきってしまった事はない。わたくしをして、そう思わせるだけでも、銀座や上野辺の広いカフェーに長年働いている女給などに比較したなら、お雪の如きは正直とも醇朴とも言える。まだまだ真面目な処があるとも言えるであろう。

端無くも銀座あたりの女給と窓の女とを比較して、わたくしは後者のなお愛すべく、そしてなお共に人情を語る事ができるもののように感じたが、街路の光景についても、わたくしはまた両方を見くらべて、後者の方が浅薄に外観の美を誇らず、見掛倒しでない事から不快の念を覚えさせる事が遙に少ない。路傍には同じように屋台店が並んでいるが、ここでは酔漢の三々五々隊をなして歩むこともなく、彼処では珍しからぬ血まみれ喧嘩もここでは殆ど見られない。洋服の身なりだけは相応にしていながらその職業の推察しかねる人相の悪い中年者が、世を憚らず肩で風を切り、杖を振り、歌をうたい、通行の女子を罵りつつ歩くのは、銀座の外他の町には見られぬ光景であろう。しかるに一たび古下駄に古ズボンをはいてこの場末に来れば、いかなる雑沓の夜でも、銀座の裏通りに行くよりも危険のおそれがなく、あちこちと道を譲る煩しさもまた少いのである。

ポストの立っている賑な小道も呉服屋のあるあたりを明い絶頂にして、それから先は次第にさむしく、米屋、八百屋、蒲鉾屋などが目に立って、遂に材木屋の材木が立掛けてあるあたりまで来ると、幾度となく来馴れ

たわたくしの歩みは、意識を持たず、すぐさま自転車預り所と金物屋との間の路地口に向けられるのである。

この路地の中にはすぐ伏見稻荷の汚れた幟が見えるが、素見ぞめきの客は気がつかないらしく、人の出入は他の路地口に比べると至って少ない。これを幸に、わたくしはいつもこの路地口から忍び入り、表通の家の裏手に無花果の茂っているのと、溝際の柵に葡萄のからんでいるのを、あたりに似合わぬ風景と見返りながら、お雪の家の窓口を覗く事にしているのである。

二階にはまだ客があると見えて、カーテンに灯影が映り、下の窓はあけたままであった。表のラデオも今しがた歇んだようなので、わたくしは縁日の植木鉢をそつと窓から中に入れて、その夜はそのまま白髯橋の方へ歩みを運んだ。後の方から浅草行の京成バスが走って来たが、わたくしは停留所のある処をよく知らないで、それを求めながら歩きつづけると、幾程もなく行先に橋の燈火のきらめくのを見た。

*

わたくしはこの夏のはじめに稿を起した小説『失踪』の一篇を今日に至るまでまだ書き上げずにいるのである。今夜お雪が「三月になるわねえ。」と言ったことから思合せると、起稿の日はそれよりもなお以前であつた。草稿の末節は種田順平が質問の暑さに或夜同宿の女給すみ子を連れ、白髯橋の上で涼みながら、行末の事を語り合うところで終わるので、わたくしは堤を曲らず、まっすぐに橋をわたって欄干に身を倚せて見た。

最初『失踪』の布局を定める時、わたくしはその年二十四になる女給

すみ子と、その年五十一になる種田の二人が手軽く情交を結ぶことにしたのであるが、筆を進めるにつれて、何やら不自然であるような気がし出したため、折からの炎暑と共に、それなり中休みしていたのである。

しかるに今、わたくしは橋の欄干に凭れ、下流の公園から音頭踊の音楽と歌声との響いて来るのを聞きながら、先ほどお雪が二階の窓にもたれて「三月になるわネエ。」といった時の語調や様子を思返すと、すみ子と種田との情交は決して不自然ではない。作者が都合の好いように作り出した脚色として拆けるにも及ばない。最初の立案を途中で変えるほうがかえってよからぬ結果を齎すかも知れないという心持にもなってくる。

雷門から円タクを傭って家に帰ると、いつものように顔を洗い髪を掻直した後、すぐさま硯の傍の香炉に香を焚いた。そして中絶した草稿の末節をよみ返して見る。

「あすこにみえるのは、あれは何だ。工場か。」

「瓦斯会社か何かだわ。あの辺はむかし景色のいいところだったんですってね。小説でよんだわ。」

「歩いて見ようか。まだそんなに晩かアない。」

「向へわたると、すぐ交番があつてよ。」

「そうか。それじゃ後へ戻ろう。まるで、悪い事をして世を忍んでいるようだ。」

「あなた。大きな声……およしなさい。」

「……………」

「どんな人が聞いていないとも限らないし……。」

「そうだね。しかし世を忍んで暮すのは、初めて経験したんだが、何と

もいえない、何となく忘れられない心持がするもんだね。」

「浮世離れてツていう歌があるじゃないの。……奥山ずまい。」

「すみちゃん。おれは昨夜から急に何だか若くなつたような気がしているんだ。昨夜だけでも活いきがあつたような気がしているんだ。」

「人間は気の持ちようだわ。悲観しちまっちゃ駄目よ。」

「全くだね。しかし僕は、何なんにしてももう若くないからな。じきに捨てられるだろう。」

「また。そんな事、考える必要なんかないっていうのに。わたしだって、もうすぐ三十じゃないのさ。それにもう、為したい事はしちまつたし、これからはすこし真面目になつて稼いで見たいわ。」

「じゃ、ほんとおでん屋をやるつもりか。」

「あしたの朝、照ちゃんが来るから手金てきんだけ渡すつもりなの。だから、あなたのお金は当分遣わずに置いて下さい。ね。昨夜も御話したように、それがいいの。」

「しかし、それじゃア……。」

「いいえ。それがいいのよ。あんたの方に貯金があれば、後あとが安心だから。わたしの方は持つてるだけのお金をみんな出して、一時払いにして、権利も何も彼かも買つてしまおうと思つているのよ。どの道やるならその方が徳だから。」

「照ちゃんていうのは確な人かい。とにかくお金の話だからね。」

「それは大丈夫。あの子はお金持だもの。何しろ玉の井御殿の檀那だんなつていうのがパトロンだから。」

「それは一体何だ。」

「玉の井で幾軒も店や家を持つてる人よ。もう七十位だわ。精力家よ。そりゃア。時々カフェーへ来るお客だったの。」

「ふーむ。」

「わたしにもおでん屋よりか、やるなら一層の事、あの方の店をやれっ
ていうのよ。店も玉も照ちゃんが檀那にそう言っつて、いいのを紹介するっ
ていうのよ。だけれど、その時にはわたし一人きりで、相談する人もな
いし、わたしが自分でやるわけにも行かないしするから、それでおでん
屋かスタンドのような、一人でやれるものの方がいいと思つたのよ。」

「そうか、それである土地を扱んだんだね。」

「照ちゃんは母さんにお金貸をさせているわ。」

「事業家だな。」

「ちやつかりしてるけれども、人をだましたりなんかしないから。」

九

九月も半なかちかくなつたが残暑はすこしも退しりぞかぬばかりか、八月中より
もかえつて烈はげしくなつたように思われた。簾すだれを撲うつ風ばかり時にはいか
にも秋らしい響を立てながら、それも毎日のように夕方になるとぼつた
りな屈ないでしまつて、夜よはさながら関西の町にあるが如く、深ふけるにつれ
てますます蒸暑くなるような日が幾日もつづく。

草稿をつくるのと、蔵書を曝さらすのとで、案外いそがしく、わたくしは
三日ばかり外へ出なかつた。

残暑の日盛り蔵書を曝すのと、風のない初冬はつふゆの午後庭ひるすまの落葉を焚たく事
とは、わたくしが独居の生涯の最も娛たのしみとしてゐる処である。曝さら書は
久しく高閣つかに束つかねた書物を眺めやつて、初め熟読した時分の事を回想し
時勢と趣味との変遷を思い知る機会をつくるからである。落葉を焚たく樂たのし

みはその身の市井しせいにあることをしばしなりとも忘れさせるが故である。

古本の虫干だけはやっと済んだので、その日夕飯しゆうめしを終るが否やいつものように破れたズボンに古下駄ふるげたをはいて外へ出ると、門の柱にはもう灯ひがついていた。夕風ゆふかぜの暑さにかかわらず、日はいつか驚くばかり短くなっているのである。

わずか三日ばかりであるが、外へ出て見ると、わけもなく久しい間、行かねばならない処へ行かずにいたような心持がしてわたくしは幾分なりと途中の時間まで短くしようと、京橋の電車の乗換場から地下鉄道に乗った。若い時から遊び馴れた身でありながら、女を尋ねるのに、こんな気ぜわしい心持になったのは三十年来絶えて久しく覚えた事がないと言っても、それは決して誇張ではない。雷門かみなりもんからはまた円タクを走らせ、やがていつもの路地口。いつもの伏見稻荷ふしみいなり。ふとみれば汚れきった奉納の幟のぼりが四、五本とも皆新しくなって、赤いのはなくなり、白いものばかりになっていった。いつもの溝際とどろかわに、いつもの無花果いちじくと、いつもの葡萄ぶどう、しかしその葉の茂りはすこし薄くなって、いくら暑くとも、いくら世間から見捨てられたこの路地にも、秋は知らず知らず夜ごとに深くなって行く事を知らせていた。

いつもの窓に見えるお雪の顔も、今夜はいつもの潰島田つぶしまではなく、銀杏いんげい返してがらに手柄てがらをかけたような、牡丹ぼたんとかよぶ鬘まげに変わっていたので、わたくしはこなたから眺めて顔ちがいのしたのを怪しみながら歩み寄ると、お雪はいかにもじれったそうに扉しりをあけながら、「あなた。」と一言強ひつとく呼んだ後、急に調子を低くして、「心配したのよ。それでも、まア、よかつたねえ。」

わたくしは初めその意を解しかねて、下駄もぬがず上口あがりぐちへ腰をかけた。「新聞に出ていたよ。少し違うようだから、そうじゃあるまいと思った

んだけれど、随分心配したわ。」

「そうか。」やっと当がついたので、わたくしも俄に声をひそめ、「おれはそんなドジなまねはしない。始終気をつけているもの。」

「一体、どうしたの。顔を見れば別に何でもないんだけれど、来る人が来ないと、何だか妙にさびしいものよ。」

「でも、雪ちゃんは相変らずいそがしいんだらう。」

「暑い中は知れたものよ。いくらいそがしいたって。」

「今年はいつまでも、ほんとに暑いな。」といった時お雪は「ちよいとしずかに。」といいながらわたくしの額にとまった蚊を掌でおさえた。

家内の蚊は前よりも一層多くなつたようで、人を刺すその針も鋭く太くなつたらしい。お雪は懐紙でわたくしの額と自分の手についた血をふき、「こら。こんな。」といつてその紙を見せて円める。

「この蚊がなくなれば年の暮だらう。」

「そう。去年お酉様の時分にはまだいたかも知れない。」

「やつぱり反歩か。」ときいたが、時代の違つている事に気がついて、

「この辺でも吉原の裏へ行くのか。」

「ええ。」といいながらお雪はチリンチリンと鳴る鈴の音を聞きつけ、立つて窓口へ出た。

「兼ちゃん。ここだよ。何ボヤボヤしているのさ。水白玉二つ……それから、ついでに蚊遣香を買つて来ておくれ。いい児だ。」

そのまま窓に坐つて、通り過る素見客にからかわれたり、またこつちからもからかったりしている。その間々には中仕切の大坂格子を隔てて、わたくしの方へも話をしかける。氷屋の男がお待遠うといつて誂えたものを持つて来た。

「あなた。白玉なら食べるんでしよう。今日はわたしがおごるわ。」

「よく覚えているなア。そんな事……。」

「覚えてるわよ。実があるでしょう。だからもう、そこから中浮気するの、お止しなさい。」

「此処へ来ないと、どこか、他の家へ行くと思ってるのか。仕様がなない。」

「男は大概そうだもの。」

「白玉が咽喉へつかえるよ。食べる中だけ仲好くしようや。」

「知らない。」とお雪はわざと荒々しく匙の音をさせて山盛にした氷を突崩した。

窓口を覗いた素見客が、「よう、姉さん、御馳走さま。」

「一つあげよう。口をおあき。」

「青酸加里か。命が惜しいや。」

「文無しにくせに、聞いてあきれらア。」

「何いつてやんでい。溝ッ蚊女郎。」と捨台詞で行き過るのをこっちも負けていず、

「へッ。芥溜野郎。」

「はははは。」と後から来る素見客がまた笑って通り過ぎた。

お雪は氷を一匙口へ入れては外を見ながら、無意識に、「ちよつと、ちよつと、だーんな。」と節をつけて呼んでいる中、立止って窓を覗くものがあると、甘えたような声をして、「お一人、じゃ上つてよ。まだ口あけなんだから。さア、よう。」と言って見たり、また人によっては、いかにも殊勝らしく、「ええ。構いません。お上りになってから、お気に召さなかったら、お帰りになっても構いませんよ。」と暫くの間話をして、その拳句これも上らずに行ってしまったも、お雪は別につまらなという風さえもせず、思出したように、解けた氷の中から残った白玉

をすくい出して、むしゃむしゃ食べたり、煙草をのんだりしている。

わたくしは既にお雪の性質を記述した時、快活な女であるとも言い、またその境涯をさほど悲しんでいないと言った。それは、わたくしが茶の間の片隅に坐つて、破団扇やれうちわの音もなるべくしないように蚊を追いなから、お雪が店先に坐つてゐる時の、こういう様子を暖簾のれんの間から透すかし見て、それから推察したものに外ならない。この推察は極く皮相とてまつに止つてゐるかも知れない。為人ひととなりの一面を見たに過ぎぬかも知れない。

しかしここにわたくしの觀察の決して誤らざる事を断言し得る事がある。それはお雪の性質いかなの如何にかかわらず、窓の外の人通りと、窓の内のお雪との間には、互に融和すべき一縷いちるの糸つながれていることである。お雪が快活の女で、その境涯をさほど悲しんでいないように見えたのが、もしわたくしの誤りであつたなら、その誤はこの融和から生じたものだと、わたくしは弁解したい。窓の外は大衆である。即ち世間である。窓の内は一個人である。そしてこの両者の間には著しく相反目している何者もない。これは何なんによるのであろう。お雪はまだ年が若い。まだ世間一般の感情を失わないからである。お雪は窓に坐つてゐる間はその身を卑しいものとなして、別に隠している人格を胸の底に持つてゐる。窓の外を通る人はその歩みをこの路地に入るや仮面をぬぎ矜負きんぷを去るからである。

わたくしは若い時から脂粉ちまたの巷に入り込み、今にその非を悟らない。或時は事情に促われて、彼女かのおんなたちの望むがまま家に納いれて箕帚きそを把とれせたこともあつたが、しかしそれは皆失敗に終つた。彼女たちは一たびその境遇を替え、その身を卑しいものではないと思ふようになれば、一変して救うべからざる懶婦らんぷとなるか、しからざれば制御かんとしがたい悍婦かんぷになつてしまふからであつた。

お雪はいつとはなく、わたくしの力によつて、境遇を一変させようと心を起している。懶婦か悍婦になろうとしている。お雪の後半生こうはんせいをして懶婦たらしめず、悍婦たらしめず、真に幸福なる家庭の人たらしめるものは、失敗の経験にのみ富んでいるわたくしではなくして、前途になお多くの歳月を持つていている人でなければならぬ。しかし今、これを説いてもお雪には決して分るうはずがない。お雪はわたくしの二重人格の一面だけしか見ていない。わたくしはお雪の窺うかがい知らぬ他の一面を曝露ばくろして、その非を知らしめるのは容易である。それを承知しながら、わたくしがなお躊躇ちゅうちよしているのは心に忍びないところがあつたからだ。これはわたくしを庇かばうのではない。お雪が自らその誤解を覺さとつた時、甚はなはだしく失望し、甚しく悲しみはしまいかということをお雪は恐れていたからである。

お雪は倦うみつかれたわたくしの心に、偶然過去の世のなつかしい幻影を彷彿ほうふつたらしめたミューズである。久しく机の上に置いてあつた一篇の草稿はもしお雪の心がわたくしの方に向けられなかつたなら、少くともそういう気がしなかつたなら、既に裂き棄てられていたに違いない。お雪は今の世から見捨てられた一老作家の、他分そが最終の作とも思われる草稿を完成させた不可思議な激励者である。わたくしはその顔を見るたび心から礼を言いたいと思つてゐる。その結果から論じたら、わたくしは処世の経験に乏しい彼の女を欺き、その身体しんたいのみならずその真情をも弄もてあそんだ事になるであろう。わたくしはこの許され難い罪の詫びをしたいと心ではそう思いながら、そうする事の出来ない事情を悲しんでゐる。

その夜、お雪が窓口で言つた言葉から、わたくしの切ない心持はいよいよ切なくなつた。今はこれを避けるためには、重ねてその顔を見ない

に越したことはない。まだ、今の中ならば、それほど深い悲しみと失望とをお雪の胸に与えずとも済むであろう。お雪はまだその本名をもその生立おいたちをも、問われないうちに、打明うちあける機会に遇あわなかつた。今夜あたりがそれとなく別れを告げる瀬戸際で、もしこれを越したなら、取返しをつかない悲しみを見なければなるまいというような心持が、夜のふけかけるにつれて、わけもなく激しくなつて来る。

物におわれるようなこの心持は、折から急に吹出した風が表通から路地に流れ込み、あちらこちらへ突当つた末、小さな窓から家の内まで入つて来て、鈴のついた納簾ひもの紐ひもをゆする。その音につれて一しお深くなつたように思われた。その音は風鈴売れんじまどが煉子窓れんじまどの外を通る時ともちがつて、この別天地より外には決して聞かれないものである。夏の末から秋になつても、打続く毎夜のあつさに今まで全く気のつかかなかつただけ、その響は秋の夜もいよいよまつたくの夜長らしく深ふけそめて来た事を、しみじみと思い知らせるのである。気のせいか通る人の跽音あしおとも静さに冴さえ、そこらの窓でくしゃみをする女の声も聞える。

お雪は窓から立ち、茶の間へ来て煙草へ火をつけながら、思出したように、

「あなた。あした早く来てくれない。」といった。

「早くつて、夕方か。」

「もつと早くさ。あしたは火曜日だから診察日なんだよ。十一時にしまうから、一緒に浅草へ行かない。四時頃までに帰つて来ればいいんだから。」

わたくしは行つてもいいと思った。それとなく別盃べつぱいを酌くむために行きたい気はしたが、新聞記者と文学者とに見られてまたもや筆誅ひつじゆせられる事を恐れもするので、

「公園は具合のわるいことがあるんだよ。何か買うものでもあるのか。」
「時計も書きたいし、もうすぐ裕だから。」

「あついあついと言ってる中、ほんとにもうじきお彼岸だね。裕はどのくらいするんだ。店で着るのか。」

「そう。どうしても三十円はかかるでしょう。」

「そのくらいなら、ここに持っているよ。一人で行って逃えておいでな。」
と紙入を出した。

「あなた。ほんと。」

「気味がわるいのか。心配するなよ。」

わたくしは、お雪が意外のよろこびに眼を見張ったその顔を、永く忘れないようにじっと見詰めながら、紙入の中の紙幣を出して茶ぶ台の上に置いた。

戸を叩く音と共に主人の声でしたので、お雪は何か言いかけたのも、それなり黙って、伊達締だてじめの間に紙幣を隠す。わたくしは突と立って主人と入れちがいあゐじに外へ出た。

伏見稲荷の前まで来ると、風は路地の奥とはちがって、表通から真向まっしうに突き入りいきなりわたくしの髪を吹乱した。わたくしは此処へ来る時の外はいつも帽子をかぶり馴れているので、風に拭きつけられたと思うと同時に、片手を挙げて見て始て帽子のないのに心づき、覚えず苦笑を浮べた。奉納の幟のぼりは竿も折れるばかり、路地口に屋台を据えたおでん屋の納簾のれんと共にちぎれて飛びそうに閃き翻ひらめつひるがえっている。溝の角の無花果と葡萄の葉は、廃屋のかけになった闇の中にがさがさと、既に枯れたような響を立てている。表通りへ出ると、俄にわかに広く打仰がれる空には銀河の影のみならず、星という星の光のいかにも森然しんぜんとして冴渡さえわたっているのが、言知れぬさびしさを思わせる折も折、人家のうしろを走り過る電車の音

と警笛の響とが烈風にかすれて、更にこの寂しさを深くさせる。わたくしは帰りの道筋を、白髻橋しろひげはしの方に取る時には、いつも隅田町郵便局のあたるあたりか、または向島劇場むかしげうという活動小屋のあたりから勝手に横道に入り、陋巷ろうこうの間を迂曲うまかくする小道を辿りたどり辿って、結局白髻明神の裏手へ出るのである。八月の末から九月の初めにかけては、時々夜になって驟雨しゅううの霽はれた後、澄みわたった空には明月が出て、道も明く、むかしの景色も思出されるので、知らず知らず言問ことといの岡おかあたりまで歩いてしまうことが多かったが、今夜はもう月もない。吹き通す川風も忽ち肌寒たちまくなって来るので、わたくしは地藏坂の停留場ていりゅうばに行きつくが否や、待合所の板バメと地藏尊との間に身をちぢめて風をよけた。

十

四、五日たつと、あの夜をかぎりもう行かないつもりで、秋袷あわせの代まで置いて来たのにもかかわらず、何やらもう一度行って見たい気がして来た。お雪はどうしたか知ら。相変らず窓に坐っている事はわかりきっていないながら、それとなく顔だけ見に行きたくて堪らない。お雪には気がつかないように、そつと顔だけ、様子だけ覗のぞいて来よう。あの辺を一巡ひとまわりして帰って来れば隣のラディオも止む時分になるのであると、罪をラディオに塗付けて、わたくしはまたもや澤田川を渡って東の方へ歩いた。路地に入る前、顔をかくすため、烏打帽ひやかしを買、素見客ひやかしが五、六人來合すのを待つて、その人たちの蔭に姿をかくし、溝とがのこなたからお雪の家を窺のぞいて見ると、お雪は新型の鬘まげを元のつぶしに結び直し、いつものように窓に坐っていた。と見れば、同じ軒の下の右側の窓はこれまで閉めきってあったのが、今夜は明あかるくなって、燈影ほかけの中に丸鬘の顔が動いて

いる。新しい抱かかえ この土地では出方でかたさんとかいうものが来たのである。遠くからで能くはわからないが、お雪よりは年もとっているらしく容貌かみじょうもよくはないようである。わたくしは人通りに交って別の路地へ曲った。その夜はいつもと同じように日が暮れてから急に風が凪ないで蒸暑なくなつたためか、路地の中の人出もまた夏の夜のように夥おびただしく、曲る角々かどかどは身を斜めにしなければ通れぬほどで、流れる汗と、息苦しさに堪えかね、わたくしは出口を求めて自動車の走せちがう広小路へ出た。そして夜店の並んでいない方の舗道を歩み、実はそのまま帰るつもりで七丁目の停留場ていりゅうばに佇立たたくんで額の汗を拭った。車庫からわずか一、二町のところなので、人の乗っていない市営バスがあたかもわたくしを迎えるように来て停とまった。わたくしは舗道から一歩踏み出そうとして、何やら急にわけもわからず名残惜なごりおしい気がして、またぶらぶら歩き出すと、間もなく酒屋の前の曲角まがりかどにポストの立っている六丁目の停留場である。ここには五、六人の人が車を待っていた。わたくしはこの停留場でも空しく三、四台の車を行き過すさせ、ただ茫然として、白楊樹の立ちならぶ表通と、横町の角に沿うた広い空地あきちの方を眺めた。

この空地には夏から秋にかけて、ついこの間まで、初めは曲馬きま、次には猿芝居、その次には幽霊の見世物小屋が、毎夜さわがしく蓄音機を鳴し立てていたのであるが、いつの間にか、もとのようになって、あたりの薄暗い灯影ほかげが水溜みずたまりの面おもてに反映しているばかりである。わたくしはとにかくもう一度お雪をたずねて、旅行をするからとか何とか言つて別れよう。その方が馳いたちの道を切つたような事をするよりは、どうせ行かないものなら、お雪の方でも後々あとあとの心持がわるくないであろう。出来ることなら、真まことの事情を打明けてしまいたい。わたくしは散歩したいにもその処がない。尋ねたいと思う人は皆先に死んでしまった。風流弦歌ちまたの巷も今

では音楽家と舞踊家との名を争う処で、年寄が茶を嚙すずつてむかしを語る処ではない。わたくしは図らずもこのラビラントの一隅ふせいはんじつにおいて浮世半日の閑を偷ぬすむ事を知った。そのつもりで邪魔でもあろうけれど折々遊びに来る時は快く上げてくれと、晚蔭おそまきながら、わかるように説明したい……。

わたくしは再び路地へ入ってお雪の家の窓に立寄った。

「さア、お上んなさい。」とお雪は来るはずの人が来たという心持を、その様子と調子とに現したが、いつものように下の茶の間には通さず、先に立って梯子はしごを上るので、わたくしも様子を察して、

「親方がいるのか。」

「ええ。おかみさんも一緒……。」

「新奇のが来たね。」

「御飯たき焚のばアやも来たわ。」

「そうか。急に賑にぎかになつたんだな。」

「暫しばしく独りでいたら、大勢だと全くうるさいわね。」急に思出したらしく、「この間はありがとう。」

「好いのがあつたか。」

「ええ。明日あしたあたり出来てくるはずよ。伊達だて締も一本買ったわ。これはもうこんななもの。後で下へ行つて持つてくるわ。」

お雪は下へ降りて茶を運んで来た。姑しほく窓に腰をかけて何ともつかぬ話をしていたが、主人あるじ夫婦は帰りそうな様子もない。その中うち梯子の降口につけた呼鈴が鳴る。馴染なじみの客が来た知らせである。

家の様子うちが今までお雪一人の時とは全くちがって、長くはいられぬようになり、お雪の方でもまた主人の手前を気兼ねしているらしいので、わたくしは言おうと思つた事もそのまま、半時間とはたたぬ中戸口を出た。

四、五日過ると季節は彼岸に入った。空模様は俄にわかに変わって、南風なんふうに追

われる暗雲の低く空を行き過る時、大粒の雨は礫を打つように降りそそいででは忍ち歌む。夜を徹して小息みもなく降りつづくこともあった。わたくしが庭の葉鶏頭は根もとから倒れた。萩の花は葉と共に振り落され、既に実を結んだ秋海棠の紅い茎は大きな葉を剥がれて、痛ましく色が褪せてしまった。濡れた木の葉と枯枝とに狼藉としてゐる庭のさまを生き残った法師蝉と蟋蟀とが雨の霽れま霽れまに嘆き叩うばかり。わたくしは年々秋風秋雨に襲われた後の庭を見るたびたび『紅樓夢』の中にある秋窓風雨夕と題された一篇の古詩を思起す。

秋 花 惨 淡 秋 草 黄。

耿 耿 秋 燈 秋 夜 長。

己 賞 秋 窓 秋 不 尽。

那 堪 風 雨 助 凄 涼。

助 秋 風 雨 来 何 速。

驚 破 秋 窓 秋 夢 綠。

そして、わたくしは毎年同じように、とても出来ぬとは知りながら、何とかうまく翻訳して見たいと思ひ煩うのである。

風雨の中に彼岸は過ぎ、天気がからりと晴れると、九月の月も残り少く、やがてその年の十五夜になった。

前の夜もふけそめてから月が好かつたが、十五夜の当夜には早くから一層曇りのない明月を見た。

わたくしがお雪の病んで入院していることを知つたのはその夜である。雇婆から窓口で聞いただけなので、病の何であるのかも知る由がなかつた。

十月になると例年よりも寒さが早く来た。既に十五夜の晩にも玉の井

稲荷いなりの前通の商店に、「皆さん、障子張りかえの時が来ました。サーピ
スに上等の糊のりを進呈。」とかいた紙が下っていたではないか。最早もはや素
足に古下駄を引摺ひきずり帽子もかぶらず夜歩きをする時節ではない。隣家となりの
ラデオも閉めた雨戸に遮られて、それほどわたくしを苦しめないよう
になったので、わたくしは家においてもどうやら燈火に親しむことができ
るようになった。

*

「溼東綺譚」はここに筆を擱くべきであろう。しかしながらもしここ
に古風な小説的結末をつけようと欲するならば、半年あるいは一年の後、
わたくしが偶然思いがけない処で、既に素人しふとになつているお雪に廻り逢
う一節を書添えればよいであろう。なおまた、この偶然の邂逅かいこうをして更
に感傷的ならしめようと思つたなら、摺れちがう自動車とかあるいは列
車の窓から、互に顔を見合しながら、言葉を交したにも交すことの出
来ない場面を設ければよいであろう。楓葉荻花秋ふうようてきかは瑟瑟しつしつたる刀禰河とねがわあた
りの渡舟わたしぶねで摺れちがう処などは、殊に妙であろう。

わたくしとお雪とは、互にその本名もその住所も知らずにしまった。
ただ溼東の裏町、蚊のわめく溝際の家で狎なれ親したんだばかり。一たび別
れてしまえば生涯相逢うべき機会も手段もない間柄である。軽い恋愛の
遊戯とはいいいながら、再会の望みなき事を初めから知りぬいていた別離
の情は、強いてこれを語ろうとすれば誇張に陥り、これを軽々けいけいに叙し去
れば情を尽さぬ憾うらみがある。ピエールロッチの名著『阿菊さん』の末段
は、能く這般しやはんの情緒を描き尽し、人をして暗涙を催さしむる力があつた。
わたくしが『溼田綺譚』の一篇に小説的色彩を添加しようとしても、そ

れは徒いたずらにロツチの筆を学んで至らざるの笑を招まねくに過ぎぬかも知れない。わたくしはお雪が永く溝際の家にいて、極めて廉価こびにその媚こびを売るものでない事は、何のいわれもなく早くからこれを予想していた。若い頃、わたくしは遊里の消息に通曉した老人から、こんな話をきかされたことがあつた。これほど気に入つた女はない。早く話をつけないと、外ほかのお客に見受けをされてしまひはせぬかと思うような気がすると、その女はきつと病気で死ぬか、そうでなければ突然い厭いやな男に見受けをされて遠い国へ行つてしまふ。何の訳もない氣病みというものは不思議に当たるものだという話である。

お雪はあの土地の女には似合あわしからぬ容色と才智とを持つていた。鶏群けいぐんの一鶴いっかくであつた。しかし昔と今とは時代がちがうから、病むとも死ぬような事はあるまい。義理にからまれて思おもわぬ人に一生を寄せる事もあるまい。……。

建込んだ汚らしい家の屋根つづき。風雨あらしの来る前の重苦しい空に映る燈影を望みながら、お雪とわたくしとは真暗な二階の窓よに倚よつて、互に汗ばむ手を取りながら、ただそれともなく謎のような事を言つて語り合つた時、突然い閃ひらき落おちる稲妻いなづまに照らされたその横顔。それは今もなおありありと目に残つて消去らずにいる。わたくしは二十はの頃ちから恋愛の遊戯あそびに耽ひつたが、しかしこの老境に至つて、このような痴夢ちむを語らねばならないような心持にならうとは。運命の人を擲や擲ゆすることもまた甚しいではないか。草稿の裏にはなお数行の余白がある。筆の行くまま、詩だか散文だか訳のわからぬものを書してこの夜の愁うれを慰なぐさめよう。

残る蚊あに額ひたいさされしわが血汐ちしお。

ふところ紙に

君は拭^{ぬぐ}ひて捨てし庭の隅。
葉^は鷄^{けい}頭^{とう}の一^{ひと}茎^{くき}立ちぬ。

夜ごとの霜のさむければ、
夕暮の風をも待たで、

倒れ死すべき定めも知らず、
錦^{にしき}なす葉の萎^{しお}れながらに
色増す姿ぞいたましき。

病める蝶ありて

傷^{きず}きし翼^つによるめき、

返^{かえり}咲く花とうたがふ鷄頭の

倒れ死すべきその葉かけ。

宿かる夢も

結ぶにひまなき晚^{おそ}秋^{あき}の

たそがれ迫る庭の隅。

君とわかれしわが身ひとり、

倒れ死すべき鷄頭の一茎と

ならびて立てる心はいかに。

丙^{ひの}子^{えね}十月卅日脱稿

底本：「溼東綺譚」岩波文庫、岩波書店

1961年7月19日改版第4刷発行

1992年5月15日 第4刷発行

本ページは(株)ふたみのテキストエディタ『原稿エディタ』で入力・作成
しました。本ページの再配布は自由ですが、この部分も含め、改ざんし
ないよう、お願いします。